

ヤマトよ永遠に(妄想)

国連宇宙軍

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

イスカンダル上空での戦闘から五ヶ月。地球は新たな危機に直面していた。地球は初めて敵に占領されてしまい、残った希望はヤマトだけである。ヤマトよ起て。三度目の危機を救うのだ!!

この作品は、前作「宇宙戦艦ヤマト新たなる旅立ち（妄想）の続編です。

この作品は、原作の「ヤマトよ永久に」とPS 2用ゲーム「宇宙戦艦ヤマト暗黒星団帝国の逆襲」及び「宇宙戦艦ヤマト二重銀河の崩壊」を参考にして作っています。なので似ているところがあります。ご注意ください。

目次

目次

設定集

1

本編

第一話

6

第二話

12

第三話

18

第四話

23

第五話

28

第六話

32

第七話

37

第八話

42

第九話

47

第十話

52

第十一話

57

第十二話

62

第十三話

66

第十四話

70

第十五話

74

第十六話

79

第十七話

83

第十八話

87

第十九話

91

第二十話

95

第二十一話

99

最終話	111
第二十三話	107
第二十二話	103

# 目次

## 設定集

### 地球連邦第一艦隊

旗艦 改アンドロメダ級一番艦春蘭

主力戦艦ドレットノート級・・・

二十隻

護衛艦・・・三隻

新型駆逐艦・・・二隻

### 第二艦隊

旗艦 アンドロメダ級二番艦アルデバラ

主力戦艦ドレットノート級・・・十三隻

護衛艦・・・一隻

新型駆逐艦・・・四隻

### 第三艦隊

旗艦 アンドロメダ級四番艦アキレス

主力戦艦ドレットノート級・・・十五隻

護衛艦・・・一隻

新型駆逐艦・・・二隻

### 第四艦隊 (航宙機動第一艦隊)

旗艦 アンドロメダ級五番艦アンタレス

主力戦艦ドレットノート級改空母・・・三隻

主力戦艦ドレットノート級・・・四隻

パトロール艦・・・二隻  
新型空母・・・四隻

第五艦隊（航宙機動第二艦隊）

旗艦 ヤマト級三番艦銀河

主力戦艦ドレットノート級改空母・・・四隻

主力戦艦ドレットノート級・・・二隻

パトロール艦・・・一隻

十一番惑星守備隊

主力戦艦ドレットノート級・・・五隻

護衛艦・・・十隻

新型駆逐艦・・・一隻

太陽系外縁パトロール艦隊

護衛艦・・・三隻

パトロール艦・・・二隻

地球上空守備艦隊

○主力戦艦ドレットノート級・・・二隻

○金剛改型宇宙戦艦・・・二十隻

○村雨改型宇宙巡洋艦・・・十五隻

○磯風改型突撃駆逐艦・・・十二隻

独立部隊

○宇宙戦艦ヤマト

新規設定

○改アンドロメダ級一番艦春蘭

撃沈したアンドロメダ改を設計からやり直し完成した艦艇。新型エンジンを二基搭載している。この艦艇は、2203年の波動砲非搭載艦建造計画発令以前に就役した艦艇なので波動砲が搭載されている。

○武装

- 三連装次元波動爆縮放射機
  - 40・6センチ四連装収束圧縮型衝撃波砲塔・・・四基
  - 22・4センチ四連装収束圧縮型衝撃波砲塔・・・四基
  - 速射魚雷発射管・・・四門
  - 重力子スプレッド発射機・・・四基
  - 小型魚雷発射管・・・八門
  - 短魚雷発射管・・・八門
  - 五連装対艦グレネード投射機・・・二基
  - 亜空間魚雷発射管・・・四基
- など

○改アンドロメダ級二番艦ネメシス

藤堂長官の命令により極秘任務についている。そのため、一番艦よりも火力が增強している。春蘭の武装は前方に主砲二基、後方に二基を背負い式だがネメシスは主砲二基に副砲一基、後方に主砲二基と副砲一基を背負い式にしている。

○追加武装

- 22・4センチ四連装収束圧縮型衝撃波砲塔・・・二基

○ヤマト級三番艦銀河

機能を失ったコスモリバースシステムを外し新型エンジンを搭載

した。これにより武装が使えるようになり大幅な改修が行われた。なお。波動砲は搭載していない。

#### ○武装

艦首・艦尾魚雷発射管・・・十二門  
48サンチ三連装陽電子衝撃砲搭・・・三基  
短魚雷発射管・・・十六門  
格納型対空パルスレーザー砲搭・・・多数  
ミサイル発射管・・・四門

#### ○新型駆逐艦

波動砲非搭載艦建造計画によって設計された艦艇。全長は百二十メートル弱である。艦隊構造は、地球軍艦艇の特徴の司令塔がなく、完全な紡錘形を成している。地球艦艇最速の機動性を生かし敵艦隊に肉薄し魚雷で打撃を与える。また偵察任務などでも活躍する。

#### ○武装

四連装宇宙魚雷発射管・・・四門  
二連装収束圧縮型衝撃砲搭・・・三基  
二連装陽電子衝撃砲搭・・・四基  
小型速射魚雷・・・四門  
二連装パルスレーザー砲・・・四基

#### ○新型空母

波動砲非搭載艦建造計画によって設計された空母。ガミラスのゲルバデス級航宙戦闘母艦を参考にして作られた。普段は甲板は飛行用だが艦載機を全機発艦させた後は艦前方の甲板が回転し、主砲が二基現れる。艦橋後方構造物はアンドロメダ級空母と酷似している。また奇襲作戦など機動力が必要とされる任務のために高機動スラスターが多数装備されている。搭載できる航空機は百二十三機である。また艦下方に主砲が一基付けられている。



○武装

格納型三連装収束圧縮型衝撃砲塔・・・二基  
三連装収束圧縮型衝撃砲塔・・・一基  
亜空間魚雷発射管・・・二門  
二連装パルスレーザ砲塔・・・二基  
短魚雷発射管・・・十六門

## 本編

### 第一話

イスカンダル上空での戦闘から五ヶ月……

#### 太陽系外縁部

「こちら第八太陽系外縁パトロール艦隊。パトロールコースから外側二十万宇宙キロにワープ反応をキャッチ。対応求む！」

「こちら第五パトロール艦隊。パトロールコースから外側三十万宇宙キロにワープ反応をキャッチ。対応求む！」

「こちら第四パトロール艦隊。パトロールコースから外側十五万宇宙キロにワープ反応をキャッチ。対応求む。」

「こちら第十パトロール艦隊。パトロールコースから外側十萬宇宙キロにワープ反応を確認した。対応求む。」

地球連邦司令部に各パトロール艦隊から通信が入り、混乱を招いていた。

「藤堂長官、緊急事態です。第四、五、八、十パトロール艦隊から敵艦のワープ反応を確認したとの連絡が入りました。」

「何だと！四方向から同時に敵艦隊が？くっ、芹沢君緊急会議を開く。各艦隊の司令官とイカルスの真田君を呼んでくれたまえ。」

「承知しました。」

#### 司令部・第二会議室

「藤堂長官、敵の侵攻は本当なのですか？」

「ああ、確かだ。パトロール艦隊からの情報によると一艦隊につき、五十隻以上らしい。」

「なんですとー！」

「ここで今回の展開だが、第一艦隊は第四パトロール艦隊、第二艦隊は第五パトロール艦隊、第三艦隊は第八パトロール艦隊、第四艦隊は第五艦隊と共に敵艦の数が一番多いとされる第十パトロール艦隊に合流してもらいたい。」

「承知しました。」

各艦隊の司令官たちは発進準備のため会議室を出ていった。

「真田くんには、ヤマトの発進準備を進めて欲しい。出来るだけ早く改修を終わらせてくれ。ヤマト乗組員についてはこちらから連絡しておく。」

「はっ。」

第一艦隊旗艦春蘭は艦隊総旗艦を務めていた。春蘭艦橋に各艦隊からの報告が入る。

「第二艦隊、発進準備完了。」

「第三艦隊、発進準備完了。」

「第四、第五艦隊発進準備完了。」

「全艦、発進！」

各艦隊は、地球海底ドッグから敵艦隊の迎撃に向けて旅立っていった。

アステロイドベルト・イカルス天文台

「ヤマト、改修工事急げよ！」

五ヶ月前の戦いでひどく損傷したヤマトは新しく設立されたアステロイドのイカルス天文台で改修工事を受けていた。改修場所は各砲塔、パルスレーザー砲の増設、装甲板の強化などだ。

また、アステロイドベルト内では航空隊が飛行訓練を続けていた。新たに、十名の新人隊員が補充され山本隊長の仕事は増えるばかりだった。

「坂本、後輩を育てるのも訓練のうちだぞ！」

「わかってますけど、戦闘より難しいんですよ！」

暗黒星団帝国・第一征服艦隊旗艦ガリアデス

「カザン司令、全艦ワープ終了しました。地球パトロール艦隊に発見された模様。作戦成功です。このまま艦隊は地球艦隊を引き付け、その間に逆方向の手薄になった宙域から重核子爆弾を地球に向けて侵攻させます。よろしいですか？」

「うむ。全艦発砲用意。地球艦隊の戦力を削る。」

「了解しました。全艦発砲用意！」

## 地球・第四パトロール艦隊

「敵艦、戦闘体制に入りました。主砲有効距離まで一万宇宙キロ。」  
「主力艦隊が到着するまでなんとでも耐えるぞ。全艦波動防壁展開。全武装発射用意。」

「ここだけでなく他の宙域でも、戦闘が始まろうとしていた。」

「主砲有効距離まで三千宇宙キロ。」

「通信使、春蘭に打電。「我、戦闘二突入セリ。至急、援軍求ム！」」  
「了解。」

## 春蘭・艦橋

「味方パトロール艦隊より打電。「我、戦闘二突入セリ。至急援軍求ム！」」です。」

「了解した。全艦隊、最大船速。パトロール艦隊の援護に向かえ。」

第五艦隊・銀河艦橋

「通信使、アンタレスに通信。」

「了解しました。」

メインパネルにアンタレスの艦長が映し出される。

「どうされました？藤堂艦長。」

「アンタレスは、航空機を下ろし敵艦隊の左舷から攻撃をお願いします。銀河は右舷から攻撃をします。」

「了解しました。では、敵艦隊から一万宇宙キロの地点で航空機を下ろすということでもいいですね。」

「はい。」

通信が終了する。

「全艦ワープ準備。」

「ワープ準備完了。」

「ワープ。」

艦隊は、各戦域に向かってワープしていった。

「〔赤城〕被弾。本艦、波動計指圧低下。あと二分で波動防壁消滅します。」

「敵艦隊尚も近づく。」

「弾幕張り続ける。艦首魚雷てえー」

パトロール艦の先から魚雷が発射される。発射された魚雷は敵艦隊に向かっていく。しかし、敵の対空戦闘によって全弾落とされる。

「〔グレットナ・グリーン〕轟沈。波動防壁消滅。」

「主砲てえー」

四門の主砲からビームが発射され、敵艦を貫く。

「二隻撃沈。」

「艦下方より、ミサイル十近づく。」

「艦底迎撃ミサイル発射。」

ミサイルが発射され敵のミサイルと交わり爆発する。

「ミサイル全弾ロスト。」

「第五パトロール艦隊から通信、「我戦闘二突入。他ノ艦隊モ各宙域デ戦闘中」」

「他の艦隊も頑張っている。我々も耐え抜くぞ。」

「敵艦隊よりミサイル多数、数判明。六十です。」

「全砲門、迎撃開始。」

「撃ち漏らし多数接近。」

「対空防御、開始。」

「全弾撃墜。」

「後方にワープアウト確認。第一艦隊です。」

「近藤、間に合ったか。」

春蘭・艦橋

「パトロール艦隊確認。」

「全艦、戦闘配置。これより攻撃を開始する。」

## 第二話

「全艦、攻撃を開始せよ」

春蘭の近藤艦長の合図と共に攻撃が開始される。数多の艦からビームが発射され、敵艦を貫いていく。

「敵艦、反撃に出ました」

「主砲照準合わせ！」

「照準指定完了」

「てえー！」

春蘭の前方の主砲二基八門からビームが発射される的確に敵艦を貫く。他の艦も負けじと敵艦を沈めていく。

### 暗黒星団帝国・第一征服艦隊

「地球艦隊、戦闘に入りました。援軍も到着の様」

「そうか、では重核子爆弾を地球に向けて侵攻させるんだ」

「了解しました」

「我々もあとからついていくぞ」

第一征服艦隊は他の艦隊と真逆の方向……つまり警戒が手薄になっっている宙域にいた。近くには五百メートルをゆうに越えるだるまのような形をした物体が浮いていた。その物体は、ゆっくり飛行を始め、太陽系に向かっていった。

### 地球・防衛軍司令部

「長官、十一番惑星方向より飛来する物体をキャッチしました。パネルに出します」



「なんだこれは？」

司令部内はざわめきに包まれた。そこにはあのだるま形の物体が映し出されていた。

「雪、至急十一番惑星守備隊を向かわせろ」

「はい。こちら司令部。至急十一番惑星守備隊は、飛行物体に近づき調査せよ」

「了解しました。」

十一番惑星守備隊

「これより謎の飛行物体調査に向かう。全艦発進」

艦隊は冥王星を発進し飛行物体に向かって航行していった。しかし、物体から三万宇宙キロのところまで通信が途絶えてしまった。

「十一番惑星守備隊、通信途絶！」

「なんだと！」

「飛行物体、木星を通過」

「長官、木星基地も通信途絶しました」

「何が起こっているんだ」

「飛行物体、火星を通過。火星基地通信途絶」

「飛行物体、地球に接近しつつあり」

「地球上空守備艦隊は？」

「上空に展開を完了しています」

「よし、なんとしてもあれを止めるんだ」

「艦隊、攻撃を開始した模様」

パネルには艦隊と飛行物体が映し出された。そこでは、地球艦隊が物体に向かって発砲していたがエネルギーは装甲に弾かれ消えていく。そして、数分後、不意に地球艦隊の攻撃が止んだ。

「状況を報告せよ！」

「艦隊通信途絶しました」

「なんだと！ 艦隊はちゃんと存在しているではないか」

「長官！ 物体が降下してきます」

「迎撃ミサイル発射！」

地表からミサイルが十本続けて放たれる。しかし、ミサイルは全弾はじかれ爆発する。

「物体、都市部から二十キロの地点に降下」

「工作班を向かわせ調査させろ」

東京・とあるビル

「サドセンセイ、テキノシンリヤクデス」

「なんじやと！ とうとう地球は敵の侵略を許してしまったのか。二度の大戦に打ち勝ったというのに。」

「ドウシマスカ？」

「・・・英雄の丘にむかうぞい」

「ナンデデスカ？」

「古代たちは、必ずここに集まってくる」

「ソウデスネ。イキマシヨウ」

佐渡たちは走って英雄の丘に向かっていった。

東京郊外

物体に向かって空間騎兵と調査部隊が近づいていく。そして調査を開始しようとしたとき、一人が不意にたおれこんだ。他の隊員が不審に思い不意に上空を見上げると上空からたくさんの敵兵が銃を乱射しながら降下してきていた。敵兵は街のいたるところで発砲し、市民は虐殺されていった。

「敵兵、十二地区を制圧。まっすぐこちらに向かってきています」

「全員白兵用意だ」

その直後、敵兵が壁を破って突入し司令部で銃撃戦が開始される。しかし、普段戦闘をしない司令部要員はあつという間に蹴散らされてしまう。

そんな中、藤堂は紙に何かを書き雪に渡した。

「長官、これは？」

「そこに古代がいる。古代と合流したらイカルスの真田に連絡をとるんだ」

「承知しました」

雪は敵が入り込んでいない通路から出ていった。

「古代君！」

「雪！ 会いたかったよ」

「そんなこといつてる場合じゃないでしょー！」

「すまない。で、長官からの命令は？」

「(ヤマト乗組員と合流し、イカルスの真田志郎と連絡を取れ)」

「真田さん？ 分かった。雪、英雄の丘に行けばみんなに会えるはずだ」

「そうね。いきましよう」

### 英雄の丘

「沖田艦長、地球はとうとう敵の侵略を許してしまいました。司令部は制圧され、都市は壊滅しました」

「サドセンセイ、アレヲ」

「佐渡先生ー」

「おお、古代と雪じゃないか。元気だったか？」

「お陰さまで」

「古代！」

「島、それに相原も。みんな元気そうだな」

さらに、太田、南部も集結しヤマト第一艦橋クルーは全員揃った。

「相原、イカルスの真田さんと通信を繋いでくれ」

相原はあらかじめ持っていた通信機で連絡を取る。

「……………イカルス天文台。真……………」

「真田さん、古代です。早速ですが、ヤマトはどこにあるのですか？」

「ヤマ……………は、今……………ここにあ……………」

通信が途絶えてしまう。

「敵からの通信妨害でこれ以上は無理です」

「古代、確かに真田さんはここにあるといったよな」

「ああ。よしイカルスにいこう」

「でもどうやって」

「政府の特別連絡艇があるわ」

「そうか」

「私が案内するわ。付いてきて」

みんなは走って向かっていった。

「古代君あれよ」

「よし、みんな乗り込むんだ」

六人は連絡艇に乗り込み、島が操縦をしようとするが操縦幹は全く機能しない。

「古代、ドームが開かないぞ。出発ができない」

「あそこにコントロールルームがあるわ。私がいつてくる」

「雪、自動発進まで二十秒だぞ」

雪は走ってコントロールルームにいき、操作を始めた。しかし、六人を追ってきた敵が雪を狙おうとする。

「くっ」

古代は敵を狙い撃つ。その間に雪はコントロールルームのパネルを操作し走って戻ってくる。ドームの屋根が開き、黒く染まった空が姿を現す。階段を上がり乗り込むとした時、雪は肩を撃たれ地面に転ぶ。

「雪、つかめるか?」

手を伸ばし雪を掴もうとするが古代の手はあと少しのところまで届かず連絡艇は発進してしまう。

「雪——!」

連絡艇は地球を脱出しイカルスに向かっていった。

数分後・地球

倒れている雪のもとに一人の男が近づき、雪を抱え連れていった。

### 第三話

太陽系外縁・第四、第五連合艦隊

「敵艦残り十二隻です」

「分かった。航空機隊を一度補給に帰還させろ。全砲門照準合わせ！」

「照準合わせ完了」

「艦長、地球より緊急通信です」

「パネルに出してくれ」

「了解しました」

「私は、地球侵攻艦隊総司令カザンである。地球の制圧は完了した。直ちに戦闘を停止せよ。死にゆく者たちへのたむけだ。すぐに戦闘を止めれば攻撃をしない。奴隷にしてやる。しかし、攻撃を続行すれば大統領や司令長官などの要人をすぐに殺す。賢明な判断を待っているぞ。」

「くっ、卑怯な真似を」

「春蘭より全軍に戦闘停止命令が出ました」

「そうか。全艦、戦闘配置解除」

「しかし、……」

「今は耐えるんだ。必ずチャンスは生まれる」

「はい」

地球防衛軍・司令部

「カザン司令、地球艦隊が戦闘を停止しました」

「そうか。聞いたかね諸君。これで地球は完全に我々の手の中にある。これをみたまえ」

パネルにあのだるまのような形をした物体が現れる。

「これは、我々が最新技術を使って作った重核子爆弾だ。この爆弾は、

人間の体や地球の環境を傷つけることなく生物の脳だけを破壊することができる。起爆装置は地球と我々の母星の二つだ。たとえば地球側が破壊されても母星側から起爆できる」

「なんだとー!」

「しかし、問題もある。五ヶ月前、我々の艦隊を倒したヤマトとかいう艦のことだ。地球艦隊には姿がなかった。ヤマトの所在をはくんだ」  
「ヤマトだとー!」

会場の防衛軍要人たちがざわめく中、藤堂だけは静かに下を向いていた。

「そのじいさん、何か知っているようだな。話せ!」

「ヤマトは必ず地球の危機を救う。場所を教えるわけにはいかない」

「そうか。このじいじいを収容所の拷問室に連れていけ。他の高官も収容所だ」

「おい、そんなこと許せるか!」

芹沢が叫ぶ。

「あのじいじいも一緒に拷問室に連れていき、我々の恐ろしさを教えてやれ」

「はっ」

藤堂と芹沢は他の高官と別に連れていかれる。しかし、通路を歩いている途中、換気口から一人の男が飛び出し敵の兵士三人を倒す。

「君は?」

「第二十六空間騎兵隊の古野間です。二人をお助けに参りました」

「そうか」

「このまま脱出します。換気口は狭いですが頑張ってください」

「そのくらい全然大丈夫だ」

「ではいきましよう」

三人は換気口を這いながら脱出していった。

アステロイド宙域・イカルス天文台

「あれがイカルスだ」

「機能しているようには見えないな」

「相原、通信で呼び掛けろ」

「了解しました。「こちらヤマト乗組員。イカルス天文台応答されました。」

「応答ありません」

「なんだと！ やられてしまったのか？」

「古代、あれを見ろ」

そこには、だんだんドームの蓋が開いていく様子が見えていた。

「よし、島。あそこに着陸しろ」

「任せろ」

連絡艇はドームに着陸していった。

「よし、中に入ろう」

古代たちは中を進んでいった。

「ここは、ヤマトの第三艦橋じゃないか」

「本当だ。そっくりだな」

「よし、第一艦橋にいこう」

エレベーターが開き、六人はエレベーターを出る。

「やっぱりヤマトだったんだ」

その時反対側のエレベーターが開いた。

「古代、久しぶりだな」

「真田さん！」

「出迎えできなくてすまなかった。作業が遅れている箇所があったな」

「心配しましたよ」

「そういうえば、雪の姿が見えないな」

六人は黙ってしまう。

「そうか。心配するな。雪は必ず生きているはずだ」

「そうだ。雪さんがやられるはずがない」



エレベーターから一人の少女が現れる。

「皆に新しい乗組員を紹介しよう。私の姪、真田漣だ」  
「よろしくお願いたします」

「ユキサンソックリダ」

「漣には雪の仕事をやってもらおうと思う」

「わかりました。それで艦長には真田さんが？」

「いや、新艦長は……」

その時、第一艦橋に一人の男が現れる。

「古代、俺だよ」

「山南さん！」

「よろしく頼むぞ」

「よし、早速地球に向かおう。ヤマト発進準備！」

「艦長、地球の旧地下ドックより通信です」

「なぜあそこから？ パネルに出してくれ」

パネルにある人物が投影される。

「長官！ ご無事で」

「ああ、空間騎兵に助けられた。ヤマトの発進準備は？」

「完了しました。これより地球に向かいます」

「いや、待ってくれ。まずは真田くんこれを見てほしい」

「これは？」

「敵によると、重核子爆弾だそうだ」

「聞いたことがあります。人間の脳だけを破壊することができる武器だとか」

「その通りだ。しかも起爆装置が敵の母星にもあるらしい。そこでヤマトは敵の母星に向かい、装置を破壊してほしい」

「了解しました。ヤマトは母星に向かいます」

「頼んだぞヤマト。我々もパルチザンを結成し、徹底的に戦う」  
「わかりました」

通信が終了する。

「よし、島。ヤマト発進だ」

「了解。補助エンジン始動。メインエンジン点火まで一分」

「岩盤偽装解除」

「ヤマト発進！」

ヤマトはイカルスから発進し、太陽系外縁へと向かっていく。

「カザン司令、ヤマトを発見しました。太陽系外に向かっていく模様です」

「恐れをなして逃げたか。まあいい。追撃艦隊を派遣しろ」

「了解しました」

数分後、地球から艦隊が発進していく。

## 第四話

十一番惑星より二十万宇宙キロ地点

「ワープ終了」

「付近に反応を確認。これは、防衛軍の艦艇です」

「なんだと？ 滲、パネルに投影してくれ」

「わかりました」

パネルに映像が投影される。そこには、防衛軍の艦艇が漂っていた。

「これは？」

「所属判明。十一番惑星守備隊です」

「そうか。あの爆弾で乗組員だけがやられてしまったから、艦艇は無事なんだ」

「副長意見具申。あの艦隊は半分以上が無人艦艇です。コントロール通信を書きかえれば我々の戦力になります」

「真田、その作業は何分ぐらい掛かるか？」

「おそらく三分程度かと」

「わかった。至急やってくれ」

「了解しました。アナライザー、一緒に来てくれ」

「リョウカイシマシタ」

真田とアナライザーが艦橋を出ていく。

「戦術長意見具申。今のうちに有人艦の乗組員を弔うべきだと思いません。したがって、宇宙葬を提案します」

「ヤマトは、作業が終わり次第発進する。そこまで時間をとることはできない。逆に他の基地職員はどうなる？ 弔うのはこの戦争が終わってからの方がいい」

「はい……」

「こちら真田、作業完了しました。これよりコントロールを開始します」

「了解した」

「リーダーにドレッドノート級三隻、護衛艦八隻を観測。ヤマト後方

五百宇宙キロに付いています」

ヤマト後方に、各艦が並ぶ。全艦が、ヤマトからのコントロールで動くようになってきている。

「全艦発進準備完了」

「後方、十一番惑星付近にワープアウト確認。これは、地球から発進した敵追撃艦隊です」

「全艦、直ちに戦闘配置。全武装発射用意。島、反転百八十度だ」

「はい。反転百八十度」

「無人艦にデータ転送完了。全艦戦闘準備完了」

「敵、戦艦五、巡洋艦六、駆逐艦十確認。正面より近づく。相對距離百五十」

「主砲照準合わせ」

「索敵よし、照準固定」

「全艦撃ち方始め!!」

各艦からビームが敵艦隊に向かって飛んでいく。敵艦隊からもビームが発射されビームが交錯する。ヤマトから放たれたビームは敵艦を複数貫通し、爆発の華を咲かせる。また無人艦から放たれたビームも致命傷とはいかないが複数発命中し、敵艦隊の動きを止めていく。

「敵艦隊、陣形乱れた」

「よし、一気に片付けるぞ。両舷増速」

「了解。増速」

山南の号令と共に艦隊が速度を上げ敵艦隊に切り込んでいく。

「艦首魚雷、てえー」

放たれた魚雷は、敵艦に命中し華を咲かせる。

「敵艦隊損耗率八十パーセントを越えた」

「艦上方よりミサイル、六近づく」

「対空防御始め!!」

ヤマトの対空機銃が、ミサイルを落としていく。

「敵艦残り三隻」

「主砲一番二番は右舷の二隻を、副砲は左舷の一隻を目標に定めよ」

「軸線に乗った」

「てえー」

ヤマトから九門のビームが発射され、敵艦をすべて撃ち抜く。

「敵艦、すべて撃沈」

「よし、終わったな。島、ワープ準備。現宙域を離脱する」

「全艦ワープ準備完了」

「ワープ」

ヤマト艦隊は異次元に消えていった。

「現宙域から三十万宇宙キロに敵影なし」

「凧いだ海ですな」

「ああ」

「もうすぐ、到着します」

改アンドロメダ級二番艦ネメシスの前方にはひとつの惑星が見えていた。

この惑星は銀河系中心部から東に五十万光年。太陽系からは八十万光年離れているガルマン星系第三惑星ガルマンである。

「よし、我々はここで待機だ」

「惑星に移民船の着陸を確認」

「これで、移民は七十五パーセントが完了しました。あと一回で完全に完了します」

「そうか。早いものだな」

「我々の役目もあと一回で終わりか」

「そうですね」

その時、不意にネメシスの通信機が反応を示す。

「んっ？ これは、艦長。防衛軍からの秘匿通信を受信。「地球が敵に占領されてしまった。いまヤマトが敵母星に向かっていて。ネメシスは直ちに現任務を破棄。ヤマトと合流してほしい。」です」

「なんだと？ デイツツ提督に通信を頼む」

艦橋のパネルに提督が表示される」

「どうされましたか？ 清水艦長」

「いま地球から通信があり、任務を離れるように言われました」

「何があった？」

「地球が敵に占領されてしまったようです。それで、ヤマトと合流してほしいと言われました」

「そうか。こちらは大丈夫だ。すぐに向かってくれ。総統には私から話しておく」

「ありがとうございます。では、失礼します」

通信が終了し、ネメシスはワープ準備に入る。

「地球からのヤマト予想航路図来ました。データ入力完了」

「機関最大出力に移行。連続ワープに入る。ワープ」

ネメシスはワープし、ヤマトを追いかけ始めた。

地球・防衛軍司令部

「カザン司令、追撃艦隊が全滅しました」

「そうか。ミヨーズに連絡を取ってくれ」

「承知しました」

「カザン司令、お呼びでしょうか？」

「君にヤマト討伐を命じたいと思う」

「わかりました。必ずや仕留めて見せましょう」

「君はいまどこにいるのかね？」

「補給基地です」

「そうか。そこから二十万光年先にヤマトがいる。頑張ってくれたまえ」

「はっ」

通信が終了する。

「ヤマトか。おもしろくなりそうだ」

カザンは不敵に笑いその場を去っていった。

## 第五話

「ワープ終了」

「レーダーに不調を確認。メインレーダー使用不可」

「漕、本当か？」

「はい。全く反応ありません」

「わかった。応急班は直ちに原因調査。判明次第すぐに作業に取りかかれ」

その時、艦橋を衝撃が揺らす。

「状況知らせ！」

「艦左舷に被弾した」

「ダメージコントロール。波動防壁展開」

ヤマトが青い光に包まれる。それと同時にいくつもの筋がヤマトに伸び、弾かれる。

「全艦戦闘配置。各艦にデータ転送」

「データリンク完了。全艦攻撃準備完了」

「レーダー復旧。敵戦力判明。戦艦十、巡洋艦八、駆逐艦五。敵艦よりミサイル接近。迎撃不能域まであと十」

「対空防御！」

ヤマトの側面に設置されている砲台から厚い弾幕が形成される。近くのミサイルはすべて撃墜される。山南は、島に敵艦隊方向への転進を命じる。それと同時に古代に指示を出す。

「島、敵方向に転進。古代、主砲の射角に入り次第撃て」

「主砲、撃ちろ方始め!!」

ヤマト艦隊は反転しながら主砲を撃ち始める。やがて、激しい砲撃戦が始まる。漆黒の宇宙で青と橙の筋が交錯していく。

「魚雷、艦下方より急速に近づく。数、一一」

「艦底ミサイル発射」

ヤマトからのミサイルが敵のミサイルとぶつかり、ふたつとも消滅する。反撃とばかりに地球艦隊から放たれたビームが敵艦を貫いていく。



「敵艦三隻撃沈、残り二十隻」

「護衛艦〔青葉〕波動防壁消失。損害大きい」

こちらにも被害が出始める。しかし、敵の撃沈数の方が多くなつていく。

「艦首魚雷撃てー」

ヤマトの前部から魚雷が六発発射される。魚雷は敵艦隊に向かっていき全弾命中する。

「魚雷全弾命中。敵艦一隻撃沈、五隻大破。あつ、敵艦隊撤退していきませす」

「本当か、雪」

「私は雪さんではありません」

「すまない、滯だったな。艦長どうしますか？」

「追撃は不要だろう。損傷した艦の補修を急げ」

「了解しました」

ヤマト艦隊はエンジンを止め、現宙域での修理を始めた。

「ヤマトか、手強い舟だ。対策を考える必要があるな」

ミヨーズは、前衛艦隊の戦闘からヤマトへの対策を考え始めた。

地球・元政府高官邸宅

ヤマト乗組員の森雪は、目を覚まし見知らぬ天井を見上げていた。その部屋には、見慣れない家具やベッドが置かれていた。また、窓の外では炎と煙で空が赤黒くなっていた。その時、

「気がついたかね」

「!?」

雪は、とつさに起き上がり戦闘体制を取ろうとする。しかし、体が思うように動かない。雪の体はケガにより全治一ヶ月だった。連絡艇の古代の手から離れ、落ちたときに骨を何本か折っており重症だったのだ。

「まだ動かない方がいい。ケガが酷いからな」

「あなたは？」

「私は、暗黒星団帝国技術将校アルフォンだ。君は、森雪だね」

「何で？」

「防衛軍のデータベースを調べさせてもらった」

「私をどうするおつもりですか」

「ケガが治るまでは、ここにいてもらうつもりだよ。ゆっくりと休むがいい」

アルフォンは、寝室を出ていく。しかし、部屋の前には見張りの兵が二人常駐している。雪は古代の心配をするが、同時に脱出の方法も考えていた。

#### 旧地下都市・建造ドック

「我々は、断固として戦う。そして、地球の平和を取り戻すのだ。みんな力を貸してくれ」

「おー！」

藤堂長官自らの演説で、ドックにいるパルチザン全員の士気が上がった。その後の説明は古野間が説明を引き継ぐ。

「ここからはおれが説明する。まずは、北と南で寸断されてしまい取り残されてしまったパルチザンの救助だ。今回は、アルファとベータにわけ作戦を展開していく。アルファは東回り、ベータは西回りで南下していく。明朝、六時に出発だ。全員気を締めて挑め。いいな」

「おー！」

早速、パルチザンたちは準備を始める。各々の武器や弾薬を装備

し、通信機等を持つ。そして……

「これより作戦を開始する。全員配置についてるな」

「アルファ、配置につきました」

「ベータ準備完了」

「行動を開始せよ」

アルファ十五名、ベータ十六名の総勢三十一名で救出作戦に臨む。まず、アルファが退路を確保する。その間にベータが付近の敵を一掃し救出をする。そして、アルファの確保した退路から脱出するという作戦である。

「こちらアルファ宗像、これより予定退路付近にいる敵を一掃する」  
「了解した」

その時、建物の影から敵兵が顔を出し撃ってくる。アルファは応戦し始める。建物と建物間で激しい銃撃戦が繰り広げられる。アルファを率いている宗像は、部下に指示を出し五人を敵兵の後ろに向かわせる。その間、敵兵に感づかれないうようにするため激しい動きで敵を引き付ける。一方の五人をさは後ろに回り込み射撃を開始する。後ろをとられた敵兵はあつという間に倒されていく。そして、ほどなく敵は一掃された。

「こちら宗像、敵の排除を確認。退路は確保した」

「了解。俺たちが向かうまで耐えてくれよ」

「ああ、任せろ」

このあとも何回か激しい銃撃戦が起こるがアルファチームは一人も怪我人を出すことなく勝利していった。

## 第六話

一方のベータチームは、敵兵を倒しながら残されたパルチザンがいる区画を目指していた。

「あともう少しだ。んっ?」

「どうしました? 隊長」

「静かに!! 全員隠れろ」

隊員たちは慌てて物陰に隠れる。そのすぐあと、暗黒星団帝国のパトロール戦車が三台通過していった。

「あれは厄介だぞ」

「どうしますか?」

「ここまで来たんだ。やるしかないだろう」

「そうですね」

「とりあえずは見つからないように進むぞ」

「了解です」

ベータチームはまた進み始める。その時、不意に通信機の音がなってしまう。

「おい、静かにしろ!」

しかしすでに遅く、周りの敵兵とパトロール戦車に気づかれてしまった。

「くっ、全員武器を構えろ」

各隊員は各々に走りだし、射撃を開始する。だが、敵兵の方が素早く一人また一人と銃弾を受け倒れていく。

しかし、ベータチームも負けていない。建物の破片などに隠れ、反撃をしていく。

「ベータ5、ベータ7、パトロール戦車の車輪部分に攻撃を集中してくれ」

「分かりました」

二人は、コスモガンの攻撃を車輪に加えていく。すると、すぐにパトロール戦車が行動不能に陥った。

「やはりだ。パトロール戦車は車輪が弱点だ。全員で攻撃を集中させ

るんだ」

「了解」

全員で協力しながらパトロール戦車を倒していく。そして最後の  
一両を破壊する。そして周りの敵兵たちを倒し、戦闘は終わりを告げ  
る。

「こちらの損害は？」

「軽症二人、重症一人です」

「そうか。ベーター1は、ここに残り治療してくれ。他の隊員はこの  
まま進むぞ」

「はい」

医療専任のベーター1を残し、先に進む。しばらくすると、内惑星  
戦争時のシエルターの入口が見えてくる。

「あそこだ。いくぞ」

ベーターはエレベーターを通りシエルターにたどり着く。そこには、  
銃を構えたパルチザンたちがいた。

「古野間じゃないか！」

「遅くなったな、永倉。迎えに来たぞ」

「そうか。やっと来てくれたんだね。隊長、私たちは助かったよ。ま  
だそこに行けそうにないわ」

「退路は確保してある。帰るぞ」

「あいよ」

残されたパルチザンと共にシエルターを出て、確保してある退路で  
戻っていく。しかし、

「またか。全員散って敵を倒せ」

「はい！」

「私たちも負けてられないよ。私たちの意地を見せてやりな」

「はいよ。おかみさん」

空間騎兵たちは、散り散りになって敵を倒していく。元ヤマトの空  
間騎兵たちが一番多く敵を倒していく。

「よし、一気に走り抜けるぞ」

旧地下都市・ドック

「君たち、よく帰ってきてくれた」

「はい。私たちも帰ってこれると思っておりますでした」

「元ヤマトの乗組員を助けられないとあつては、沖田くんや土方くんに怒られてしまうからな」

「親父さんもあの世で元気に酒飲んでますよ」

「そうかもな」

藤堂長官との会話が終わり、空間騎兵たちはつかの間の休息を得る。

地球から十七万光年・ヤマト

「長距離レーダーに感あり。パネルに出します」

そこには、かつて木星で戦った浮遊大陸よりも大きい建造物が浮いていた。

「真田、あれをなんだと思うかね」

「敵からえられた情報から、移動型の補給基地だと思われます。また、基地内部には戦艦などの反応も感知されています」

「なるほど。古代、戦術長としての意見は？」

「はい。この基地を叩いておけば、敵の補給を断てるので、地球制圧艦隊を退けられるかも知れません」

「そうだな。俺としてもこの基地は叩いておきたい。古代、攻略作戦を纏め、俺に提出してくれ」

「はい」

「全員解散」

ヤマト・艦長室

「古代、作戦は纏められたかね」

「はい。まず、航空隊での奇襲をし、ヤマト主砲の射程に入りしだい援護射撃を実施。最後にヤマトの全火力で叩きます」

「わかった。それでいこう。航空隊の指揮は、古代に一任する」

「わかりました」

「ところで古代、困っていることはあるかね？」

「いえ、特にありません」

「そうか。何かあつたらすぐに相談しろよ」

「はい。失礼します」

古代は、艦長室をあとにする。

「これより、作戦を説明する。まず、航空隊で奇襲を掛ける。そこにヤマトの砲撃で援護射撃を実施。打撃を与えたら、ヤマトに帰還。残りはヤマトの火力でたたく。」

そこで今回は航空隊を二つに分け、アルファはエンジン、ベータはドーム内の補給中の艦艇を叩いてくれ。アルファは俺、ベータは山本が指揮を取る」

「はい」

「全員生きて帰ってこい。以上だ。全員作戦準備に掛かれ」

「はい」

航空隊員たちは、作戦室をあとにしていく。

「アルファ1、古代take off」

「ベータ1、山本take off」

二機のコスモゼロがヤマトを後にし飛んでいく。それを見届け、山南は各員に命じる。

「ヤマトは航空隊の突入を確認後、前進し援護射撃を開始する。全員備えておけ」

「はい」

「アルファは、あの隙間から突入する。全機、付いてこい」  
「了解」

古代たちアルファは、基地内部に突入していった。



## 第七話

「全機、付いてこい。壁なんか当たるなよ」

古代のアルファチームはエンジンルームに行くため、細い通路を飛行していた。

「古代戦術長、あれを！」

「あれは！」

そこには大きなコントロールルームがあった。いろいろなパイプが繋がれ、エネルギーが伝達されていた。

「全機、火器管制解除。攻撃開始！」

コスモゼロやコスモタイガーからミサイルが次々と発射される。ミサイルは誘導にしたがって真つ直ぐコントロールルームに向かっていき、やがて大きな爆発を生み出す。

「こちらアルファ、エンジンの破壊に成功しました」

「こちら相原、了解しました」

「よし、ヤマトに帰還するぞ」

「了解」

古代たちは来た道に戻り、ヤマトに帰還するために動き出した。

一方の山本隊は、ドーム内を目指していた。

「よし、もうすぐドーム内だ。全機火器管制解除。ド派手にやってやりな」

「了解」

コスモタイガーからミサイルや機銃が発射され、敵艦艇から炎が上がっていく。その時、基地の外側で大きな衝撃と共に穴が開く。

「ヤマトから援護射撃が開始されたな。全機攻撃が終わり次第、脱出だ」

艦艇から艦艇に誘爆が広がっていく。そしてドームが割れ炎が吹き出す。

「全機、機銃に気を付けヤマトに帰還」

基地の機銃から発射される弾幕を避けながら航空隊は帰還して行く。

「航空隊の帰還を確認」

「島、ヤマト最大船速。南部、火力を集中させ破壊せよ」

「はい。主砲撃ち方始め」

ヤマトやドレッドノート級が前進し、館前方からビームが次々と放たれ、敵基地を無力化していく。そのうち一つのビームがエンジンブロツクを貫く。

「司令、エンジンから誘爆が広がっています。もう持ちません。う、うわー！」

「ここまでか。ヤマト悔りがたし」

補給基地は宇宙に華を咲かせ、完全に消えていった。

「敵基地の撃破を確認」

「分かった。こちらの被害は？」

「特にありません」

「分かった。ヤマト発進せよ。」

ヤマト艦隊は再び母星に向けて出発していく。

地球・元司令長官室

「補給基地が落ちただと。ミョーズは何をやっているんだ！」

「カザン司令。落ち着いてください」

「すまん、私としたことが。まあいい。司令のグロータスは気にくわなかった」

「もうひとつ報告があります。最近各地でパルチザンの抵抗が激化しています」

「抵抗して何になる。どうせ死ぬのだ。おとなしくしてればいいものを」

カザンは不敵な笑みを浮かべながらモニターを眺めていた。

「アルフォン将校、何かご用ですか？」

「雪、君の怪我は大分回復している。もうそろそろ、ここでの生活にも飽きてきだろう。明日は、つれていきたいところがある。一緒に来てもらおうぞ」

「どこにいかれるのですか？」

「それは明日のお楽しみだ。今日はよく休みたまえ」

アルフォンは部屋を出ていく。雪は、アルフォンが出ていくのを確認して首から下げているネックレスをとる。

「確か、ここにあったはず」

雪が下げているネックレスは真田が作った特注品で司令部のネットワークに入ることができなのだ。

「あった。これだわ！」

そこには、政府高官邸宅の地図が写し出されていた。

「これで脱出することができる」

雪は密かに脱出を企てていたのだ。

ヤマト・第一格納庫

古代は、コスモゼロの手入れを行っていた。

「ねえ、おじさま」

「滯か、俺はおじさまなんかじゃないよ」

「いえ、おじさまよ」

「だからおれは、おじさまなんかじゃないってば！」

「本当にわからないの？ 私よ、サーシャよ。覚えてるでしょ」

「サーシャ？ 君は、あのサーシャなのか？」

「そうよ。おじさまの家に一ヶ月いたあと、真田さんに引き取られたのよ」

「しかし、あのときは少女だったはずじゃないか」

「私には、半分イスカンダルの血が流れてるから成長が速いの」

「そうか。だからわからなかったんだ。そして、俺が守兄さんの弟だからおじさまなのか？」

「そうよ。やっと分かったのね。フフフ」

「それにしてもヤマトに乗ってるなんて」

「お父様とお話できなかったから、おじさまからお父様のお話を聞くと思ったの」

「なるほど。俺で良ければなんでも話すよ」

「ありがとう、おじさま」

「だけど、おじさまはやめてくれないか」

「嫌よ。おじさまはおじさまなんだから」

「分かったよ」

その後、古代は、兄について熱くサーシャに語った。

「ミョーズ様、あと十分ほどでアルファ砲搭載艦の配置が終了いたします」

「そうか。分かった」

「しかし、よく配備許可が出ましたね」

「そうだな。まあ、それだけヤマトを危険視しているのだろう」

「そういえば、補給基地が落ちてしまいました。いいのですか？」

「ああ、グロータスは気に入らなかったからな」

「本当にあの人嫌われてますね。なんかかわいそうです」

「仕方ないだろう。すべてアイツが悪いんだから」

「そうですね。配置完了しました」

「よし、ただちに発射準備にはいれ」

「全艦、発射準備完了」

「撃て」

三隻の艦艇から発射された黄色いエネルギーの筋は何もない宇宙空間を進んでいく。

## 第八話

地球から三十万光年・ヤマト

ヤマト艦隊は真つ暗な宇宙を航行していた。そんな中、ヤマト艦隊左舷方向に三つの光点が見えた。

「あつ！本艦左舷方向より高エネルギー反応複数接近。直撃コースです。」

「島、緊急回避だ！真田、全艦に波動防壁緊急展開！」

ヤマト艦隊は全速力で上昇を始める。そしてヤマトや他の艦隊に青白い膜が形成されたその直後、ビームがヤマト後方を掠めていく。

「波動防壁貫通された！」

「第三砲塔ならびに両舷カタパルト消失！第一格納庫被害甚大。」

「隔壁閉鎖！消火班は直ちに第一格納庫に急行。消火を開始せよ。」

「護衛艦〔衣笠〕〔五十鈴〕エネルギー直撃により轟沈！」

「山崎、エンジンを停止してくれ。炎が移る可能性がある。」

「分かりました。」

ヤマトはエンジンを停止し、現宙域に留まる。

「艦長。さっきの高エネルギーの正体分かりました。あれは、五か月前の戦闘の時にゴルバが使用した主砲と同じものだと思われま。ただ、大分威力が小さいですが。」

「敵は、あれを小さくして普通の艦艇にも搭載したのだろう。厄介だぞ。」

「もうすぐ消火も完了いたします。ワープして逃げるべきかと。」

「そうだな。島、ワープ準備に入ってくれ。」

「了解。」

「消火完了しました。」

「ワープ準備完了。ワープ！」

ヤマト艦隊は、異次元に消えていく。

ヤマト艦隊は通常空間に現れ、氷の鎧を剥ぐ。

「ワープ終了。全艦異常なし。」

「レーダーに感。前方に敵艦隊を確認。」

「仕向けられたか！くそっ！」

「全艦、戦闘配置！」

「主砲撃ち方始め!!」

ヤマトや他の艦艇から青い筋が発射される。敵艦隊も砲撃を開始し、激しい砲撃戦となる。

「第一甲板に被弾。第四通路閉鎖！」

「敵艦、二隻撃沈。」

「ドレッドノート級〔山城〕ダメージ増加。爆発します。」

その時、ヤマトの速度が低下し始める。

「徳川！エンジン出力低下しているぞ。何をしている!!」

「すみません！原因不明のエネルギー漏れが起こっています。」

「なんとかしろ！それでもヤマトの機関士か！」

敵のビームのうち一本がヤマトに直撃する。艦橋を大きな揺れが襲う。

「第一砲塔、沈黙！左舷パルスレーザー群応答なし。」

「艦首魚雷撃てー！」

ヤマトから魚雷が六本発射される。魚雷は敵艦隊に向かっていき、直撃する。

「全弾直撃！」

「艦左舷前方よりミサイル接近。」

「避けきれない！」

ミサイルが三本ヤマト前部に命中する。そこを中心に小さな爆発が起き、乗組員が外に吸い出されていく。

「真琴！こつちを頼む。」

「はい！」

医務室では、負傷者が入りきず通路に溢れていた。

「星名さんはこつちを頼みます。」

「分かりました。」

船務科の星名が、応急処置を手伝いながら通信をする。

「治療の人数が足りません!!誰か来て!」

「分かりました。すぐにいきます。」

数分後には船務科の西条などが合流し、処置を開始していく。

「あと一押しだ。全火力をヤマトに集中させ撃破せよ。」

艦隊の砲門すべてがヤマトに向く。その時、艦隊の右端にいる艦艇が次々と爆発していった。

「巡洋艦、三隻轟沈!」

「何があつた?」

「右舷より地球の艦艇が砲撃をしてくれています。」

「なんだと!戦力を割いて敵艦艇を撃破しろ。すぐにだ。」

艦隊の三分の一が転進していき戦闘を始める。しかし、圧倒的な火力の差で全滅してしまう。

「派遣した艦艇全滅しました。敵はそのまま本隊に肉薄してきます。」

「仕方がない。一時撤退する。」

ミョーズの艦隊は転進しワープしていった。

「敵艦隊、撤退して行きました。」

「助かったのか?でもあの艦艇はなんだ?」



「えっ、春蘭じゃないんですか？」

「いや、あれは二番艦のネメシスだ。確か藤堂長官の密命で独自に行動していたはず。」

「ネメシスより通信です。パネルに出します。」

パネルに映しだされた人物に古代たちは見覚えがあった。

「清水じゃないか！」

「皆さんお久しぶりです。」

「そうか。君は艦長になったんだね。」

「はい。退役された前艦長に代わって私が拝命されました。」

「でも、何でここに？」

「実は長官の密命でガミラス移民船団の護衛についていたんです。そうしたら、旧地下ドックから通信がありヤマトと合流して欲しいと言われました。そしてヤマトの航路図を元に追っていたんです。」

「なるほど、だから俺たちと合流できたのか。」

「これから皆さんとご一緒させていただきます。山南艦長、よろしくお願います。」

「ああ、こちらこそよろしく頼むぞ。」

「では、こちらでもヤマト艦隊の修理を手伝わせていただきます。」

「それはありがたい。なにしろひどくやられたもんでな。特に艦後部は損傷がひどい。手伝ってもらえるなら嬉しいよ。」

「今から作業用のロボットを向かわせるので指示をお願いします。」

「分かった。」

通信が終了し、ヤマトやドレッドノート級に作業用ロボットが配置され修理を始める。

「艦長、私は工作室でカタパルトや主砲を製造してきます。」

「真田、出来るだけ急いでくれ。」

「分かっています。」

真田は艦橋を出ていく。

「それにしても清水が艦長か。成長したなあ。」

「そうだな。」

ヤマトの外では急ピッチで作業が進められていた。

## 第九話

地球から三十六万光年

「これは、星の残骸ですかね？ 真田さんどう思いますか？」

「数ヶ月前に超新星が爆発したようだ。ガスが濃く、レーダーは使えないだろう」

「レーダー、スキャナー共にブラックアウトです」

「使えるのは目視のみか。全員目視による索敵についてくれ」

「はい！」

「こちら、展望室。右舷より敵艦隊の接近を確認」

「分かった。全艦直ちに第一戦闘配置。主砲発射用意！」

「各艦波動防壁展開」

「全艦データリンク完了。照準すべてよし！」

「撃ちー方始め!!」

ヤマトや他の艦艇からショックカノンが発射される。しかし、いつもは敵に向かって真っ直ぐ飛んでいくはずのショックカノンが曲がりあらぬ方向に飛んでいく。

「どういうことだ！」

さらに砲撃が飛んでいくがすべて敵艦隊から外れてしまう。さらに航行速度が落ち始める。

「山崎さん、エンジン出力が落ちていきます。なんとかありませんか？」

「すみません。すぐに原因を調査します。徳川、どうした？」

「原因不明です」

「敵は何らかの装置を使っているはずだ。そのせいでエンジン出力も落ちているのだろう。これよりヤマト主砲は三式弾に切り替え、他の艦艇は魚雷で対応せよ」

「分かりました。主砲三式弾装填。各艦データ修正」

「ネメシスより通信。パネルに出します」

清水がパネルに現れる。

「山南艦長、ネメシスは最新型のエンジンを二基搭載しています。多少威力と射程は落ちますがショックカノンを撃てます。レーダーも多少使えますが？」

「そうか。ならネメシスそのまま砲撃を続けながら敵の干渉装置を探してくれ」

「分かりました。」

ヤマトは実弾に切り替え発射する。他の艦艇は魚雷で敵艦隊を攻撃していく。その間に、ネメシスは砲撃を続行しながら移動し干渉装置を探す。ヤマトから発射された三式弾が命中し敵艦をへこませ爆発させる。

「三式弾命中。敵艦二隻撃沈」

「敵艦隊砲撃激しくなった」

「展開時間修正。残り三分で波動防壁消失します」

「ネメシスが装置を破壊するまではなんとしても持ちこたえろ！」

「はい！」

山南が皆を激励し、戦意を高める。

ネメシス・艦橋

「レーダーに反応は？」

「ありません」

「そうか。ネメシスのレーダーが万全ならすぐにも見つかるのに、くそっ！」

清水は思わず嘆いてしまう。その時、

「待って下さいい！ 敵艦隊後方に四つの影を捉えました。干渉装置だと思われまます」

「そうか。ヤマトに通信を繋いでくれ！」

「分かりました」

ヤマト・艦橋

「ネメシスより通信！」

「山南艦長、干渉装置の発見に成功しました。しかし、敵艦隊の後方に位置しており突破しない限り破壊することは不可能です。」

「そうか。清水艦長、ネメシスは波動砲を撃つことは出来るか？」

「艦長！ それは……」

古代が反論を唱えようとするが、山南が目で制する。

「はい。普段より多くのチャージ時間を要しますが発射可能です。」

「そうか。ならすぐにでもチャージに入ってくれ」

「分かりました。」

通信が終了する。

「山南艦長、波動砲の発射には司令部の許可が必要なのではないですか？」

「実は、波動砲の発射は前もって私に一任されているんだ。だから私がいいといえれば撃つことができるのだよ」

「それではだめじゃないですか!!」

「古代の気持ちも分かるが今の状況では波動砲を撃つしかないのだ」「でも……」

「古代！ 波動砲が制限されても撃たなきゃいけないときはある。覚悟を決めなければいけないんだよ」

古代は三年前の沖田艦長の言葉を思い出す。そして、奥歯を噛み締める。

「はい……」

「ネメシスが波動砲のチャージを完了するまで艦隊は囷になる。全艦、最大船速。島、ネメシスの前に出ろ」

「了解。ヤマト最大船速。ネメシスの前に出ます！」

ヤマト艦隊はネメシスの前に移動し、砲撃を開始する。しかし、前に出ると同時にさらに敵からの砲撃が激しくなる。その砲撃がヤマ

トの波動防壁を貫きヤマト本体に被害を与え始める。

「波動防壁消失！」

「第四ブロックに被弾！ 火災が広がっています！」

「第二砲搭応答してくれ！ くそっ！」

「ドレッドノート級一隻被害拡大」

艦橋では被害報告が重なり、暗い雰囲気になっていく。

非常灯が常時光り、艦橋を照らしている。

「怯むな!!撃てー！」

ヤマトから三式弾が発射され、敵艦を貫き爆発させる。

「ドレッドノート級一隻轟沈！」

ヤマトの隣を航行していたドレッドノート級が爆発する。その時、ネメシスからチャージ完了の報告が入る。

「全艦、急上昇！ 波動砲の射程から退避せよ」

全艦がネメシスの上面に移動し、波動砲の射程から避ける。その直後、ネメシスの波動砲口が光り莫大なエネルギーが放出される。放出されたエネルギーは敵艦隊に向かっていき一瞬で爆発に追い込み、敵艦隊の中央に大きな穴を開ける。そこを見逃さずに山南は指示を出す。

「開いた穴に突っ込み装置を破壊するんだ！」

「はい！ 機関最大船速、ヨーソーロー」

「装置に全火力を集中せよ」

ヤマト艦隊は敵艦隊の開いた穴に向かって航行し、装置に全火力を向け破壊していく。最後の装置を破壊し終えた時、シヨックカノンを発射可能になった。

「主砲にエネルギー伝達。全砲搭シヨックカノン撃てます」

「主砲、撃ちー方始め!!」

発射されたビームは艦艇を簡単に貫き爆発させる。すぐに敵艦隊は壊滅し撤退していく。数分後、全ての艦が撤退し戦闘は終わりを告げた。

「終わったか。全艦、補修を急げ」

「はい」

数時間後、ヤマト艦隊は再び母星に向かって航行し始めた。

## 第十話

「次はないぞ、ミョーズ。肝に命じておけ。」

「はい。次こそ必ずやヤマトを破壊してみせます」

「期待しておるぞ。」

「お任せください」

通信が終了し、ミョーズは奥歯を噛み締める。

「くそっ！ ヤマトの位置はどこだ！」

「我が艦隊の前方、五十万光年を航行しています」

「くっ、この私を二度も破るとはいいい度胸をしている。しかし、次こそは倒すぞ。強襲艦の準備は出来ているな！」

「はい。準備は出来ています」

「よし、艦載機は全機発艦！ 陽動を行え！」

「艦載機、全機発艦！」

主力空母から艦載機がヤマトに向かって発艦していく。

ヤマト・艦橋

「後方から編隊多数接近！ 残り三分で接触します」

「航空機隊は直ちに発艦し、敵編隊を撃墜せよ」

「了解」

ヤマト後方下部のハッチが開き、次々とコスモタイガーが射出されていく。そして、カタパルトからコスモゼロが発艦する。総勢三十機のコスモタイガーが漆黒の宇宙を飛んでいく。

「全機、火器管制解除。各自、敵を落とせ」

「了解。腕がなるぜ！」

「坂本、はしやぎ過ぎてへマするなよ」

「分かっていますよ、隊長」



すぐに機体同士が入り乱れあちこちで爆発の華が咲く。

その頃、ヤマトの後方にワープしてくる艦艇があった。

「ん？、艦後方にワープアウト反応あり！ 敵艦が突っ込んで来ます」

「島、回避だ！」

「間に合わない！」

「波動防壁展開も間にあいません！」

「全員、衝撃に備えよ！」

その直後ヤマト全体に大きな衝撃が走る。ワープアウトしてきた敵艦はヤマト左舷後部にめり込み、奥に刺さっていく。艦内には、警告音が鳴り響き、通路には衝撃によって倒れた乗組員たちで溢れていた。そして、敵艦の艦首が開き、兵士が銃を持って出てくる。

「古代！ 敵艦から兵士が降りてきたぞ。すぐに保安部と戦闘班を向かわせて対処に当たらせろ」

真田がとっさに指示を出す。

「はい。星名、聞こえているな。保安部を敵艦がめり込んだ位置に急行させてくれ。俺も戦闘班を従えて向かう」

「分かりました」

### ヤマト内・通路

「衝突した敵艦より兵士が艦内に入り込んで来ています。各員武装を携行し対処に当たってください。繰り返しします。……」

艦内にはアナウンスが流れ全員が武器を携行し敵兵士の元へ向かっていく。

「各員、そこを曲がったらすぐに射撃を開始せよ」

「了解」

保安部が通路の角を曲がるとそこではすでに射撃戦が開始されており、あちこちで人が倒れていた。

「うわ！」

物陰から敵兵が飛び出し射撃してくる。保安部もあわてて反撃するが、先手を取られているので被害が増えていく。

「星名！ 大丈夫か？」

「戦術長！」

そこに古代率いる戦闘班が加わり、優勢が逆転する。その時、古代のヘッドホンに艦底の第三格納庫から通信が入る。

「古代！ 敵兵が侵入してきた。だれか回してくれないか？」

「分かりました。すぐに保安部を向かわせます。榎本さんもう少し耐えてください」

「分かった。」

「ということだ、星名。ここは任せて、格納庫に向かってくれ」

「分かりました。いくぞ！」

「はい」

星名たちは走って下層デッキに向かっていく。古代たちはここに残り、十数人の敵兵と戦い続ける。数分後、すべての敵兵を倒し終わり星名たちの救援に向かっていく。

一方の艦橋では山南や真田が各所の被害情報を元に指示を出していた。

「山南艦長、大変です。きつきの衝撃でエンジンの伝導パイプが歪みエネルギー伝達が上手くいきません。すぐに停止してもよろしいですか？」

「ああ、すぐに停止してくれ。真田、工作班をエンジンルームへ」

「分かりました」

「それと敵艦の切り離し状況はどうなっている？」

「はい。ただ今切り離し作業中です。あと十数分で終わると思います」

「そうか。出来るだけ急いでくれ」

「はい」

その頃、第三格納庫では新たな敵兵と保安部が戦っていた。しかし、この時点で保安部は先の戦闘で何人か失っており、どうしても劣勢になってしまっていた。さらに、敵兵の一人が星名に銃を向けて発砲しようと狙いを定めていた。そして敵兵が引き金を引く瞬間、古代が星名を庇って銃弾をくらってしまった。

「ぐっ！」

「戦術長！ くそー！」

残りの戦闘班も加わってすぐに戦闘は終わりを告げる。

「こちら保安部星名。すぐに医療班を第三格納庫へお願いします」  
「分かりました。すぐに向かいます」

数分後、医療班が到着し古代を担架に乗せ医務室に運んでいく。その後、すぐに処置が行われ古代は一命をとりとめることができた。そして敵艦が切り離され、ヤマト内での戦いは終わりを告げた。

「そうか、強襲艦も失敗したか。ふっ、神はどうしても私たちの味方してくれないようだ。これより、残った艦艇で特攻を行う。ただし、アルファ砲搭載艦だけは本星に撤退してくれ。失ったら困るからな」  
「了解しました。最大船速、これよりヤマトに特攻を行います」  
「皆、すまなかつたな。今までこんな私に付いてきてくれてありがとう」

「何をいつてるんですか、私たちはあなたに一生付いていくと決めたんです。どんな所でもへっちゃらですよ」

「そうか。ふっ、私はカザンと違っていい部下を持ったようだ。それでは行こうじゃないか」

ミヨーズ艦隊の残った十三隻はヤマトに向かって最後の特攻を開始した。

## 第十一話

「レーダーに感！ 後方三万宇宙キロに敵艦隊確認。真っ直ぐ突っ込んで来ます」

「相原、ネメシスに通信を頼む」

すぐにメインモニターに清水が写し出される。

「そちらでも敵の接近は探知しているな」

「はい。」

「ヤマトはエンジントラブルの影響で動くことが出来ない。対応は任せてもいいか？」

「はい。お任せください。」

「無人艦のコントロールを渡す。頼んだぞ」

「分かりました。」

ネメシスとの通信が終了し、山南は各員に指示をだす。

「真田、ネメシスにコントロールを渡してくれ。そしてエンジンの修理はあとどのくらいで終わるか？」

「あと十分ぐらいです」

「そうか。急いでくれよ。それと南部、後方を狙える火器はネメシスたちを支援してくれ」

「分かりました。第三主砲、第二副砲エネルギー伝達。艦尾魚雷装填」

ネメシス・艦橋

「ヤマトから無人艦コントロール来ました」

「よし、全艦、百八十度反転。主砲発射用意！」

ネメシスは艦首を敵艦隊に向ける。同時に、無人艦も反転し敵艦隊を射程に入れる。

「全艦、発射準備完了」

「撃ち方始めー！」

ネメシスの計二十門の砲門からビームが発射され、敵艦隊に向かっ

て飛んでいく。ネメシスからコントロールされている他の無人艦も砲撃を始める。放たれたビームは複数の敵艦艇を貫き爆発させる。しかし、敵艦隊は速度を緩めずに突っ込んで来る。

「敵艦隊速度緩めません!! 特攻する気のようにです。目標予想は……ヤ、ヤマトです!」

「くそ! なんとしてもヤマトに近づけるなよ! 艦首速射魚雷てえー!」

ネメシスの艦首から魚雷が発射され、敵に向かって飛んでいく。魚雷はそのままエンジンブロックに直撃し艦を大破させる。

「敵艦残り八隻いまだ健在。速度変わらず。残り三分で接触します」  
「攻撃の手を緩めるな!」

ネメシスからの砲撃がさらに激しくなり、みるみるうちに敵艦隊は数を減らしていく。

#### ヤマト・艦橋

「こちら山崎、エンジンの修復完了しました」

「そうか。島、反転百八十度。南部、全火器発射用意! 目標、敵艦隊」

「了解しました。主砲撃ち方始め!! 続いて艦首魚雷水平射」

ヤマトの三基十二門からエネルギーが発射され敵艦隊に飛んでいく。既にネメシスや無人艦の砲撃によって五隻まで減らされていた敵艦隊にさらにヤマトからの砲撃が加わりさらに数を減らす。

「火力を敵旗艦に集中させろ」

「分かりました」

ヤマトの主砲二基と副砲一基が正面を向き、敵旗艦に狙いを定める。

「撃てー!」

ヤマトから九筋のビームが発射される。

「残りは敵旗艦一隻だ。ネメシスの火力で撃破する。撃ち方始め！」

ネメシスからも十二筋のビームが放たれ、敵艦に向かっていく。

「複数のエネルギー接近！ 避けきれません!!」

ガリアデスの艦橋では兵士が慌てふためいていた。

「騒ぐな。死ぬときくらい最後まで静かにしてくれ。ふつヤマトか、いい相手だった……」

ミヨーズは兵士を言葉で制し、目を瞑って人生を振り返る。その後艦橋は明るい光に包まれる。数秒後、エンジンの誘爆しガリアデスは爆発して漆黒の宇宙に消えていった。

### 地球・強制収容所

ヤマトがミヨーズの艦隊と戦っている頃、雪はアルフォンに連れられて砂漠地帯にある政府高官が収容されている施設に来ていた。

「アルフォン将校、ここは？」

「ここは連邦政府の高官が収容されている強制収容所だ。ここに連れてこられた者には武器や新兵器を作らせている。今日は新しく完成する無人兵器の試作機を見てもらう」

わりと大きめの部屋に案内され雪は戸惑っていた。そして数分後、部屋の反対側のドアが開き四足歩行のロボットが歩いてくる。

「まだ名前は付いていないがとりあえずC1と呼ぶことにしよう。こ

のC1は対パルチザン用に開発されたものでね。ショットガンに手榴弾、アサルトライフルなど多岐に渡る武装が付いているんだ」

その時、壁からターゲット用の板が現れる。C1はすぐに両肩のアサルトライフルを掃射し板を穴だらけにする。

「これで地球上のパルチザンは……なんだ？」

収容所全体に警報が鳴り響く。アルフォンは所長室に走っていき情報を確認する。

「どうやらパルチザンが侵入したみたいだな。見せてやろうじゃないか。C1の実力を」

#### 数時間前

「全員準備は出来たな。各員、十分後には地上に集合してくれ。以上だ」

「はい」

古野間はパルチザンのなかでも特に実践経験があり、なおかつ判断力や行動力に優れている十八人を選び、収容所解放作戦を開始しようとしていた。

「これより分かれてバギーに搭乗、収容所の一キロ手前でバギーを降り、そこからは徒歩で移動し換気口から中に侵入。三チームに分かれ制御区画、兵器開発区画、牢屋区画を個々に制圧し政府高官を解放する。一応、増援も用意してはあるがそれはあくまでも最終手段だ。心してかかれ！」

「はいー」

数分後、バギーは発進する。三両のバギーは都市部を突き進み、やがて砂漠地帯に入ってしまった。それから数十分、建物が見えバギーは



停止する。古野間たちはバギーを降り歩いて収容所に向かっていた。

## 第十二話

「ブラボーは東の通気口から、キャットは西の地下水路から侵入せよ」  
「了解」

通信を終了し、古野間はアルファを率いて南の通気口から侵入していく。少し狭い通路を進んでいくと広く解放された部屋が見えてくる。古野間は部下に停止の指示を出し、部屋内を見渡す。部屋には作業台と思われる机と作業用機械がいくつも並んでいた。

「よし、あの機械の裏に隠れながら進むぞ」  
「了解」

声をおさえながら返事をしてアルファチームは部屋に入り、機械の影を進んでいく。

「待て！」

古野間が声を張らずに後方に指示を出す。古野間が部屋の角からドアの方向を覗くと二人の兵士が話をしながらこちらにやって来るのが見えた。

「今日視察に来ているアルフォン将校は地球人の女を連れてるらしいぜ」

「あの人なに考えてるか分からないときあるよな。どうせ地球人は皆死ぬんだ。ほっとけばいいのによ」

「そうだよな」

「さっさと片付けて戻ろうぜ」

兵士たちはなにやら机で数分間作業をして、部屋を出ていく。

「隊長、今の話って……」

「そうだな。長官に報告して救出作戦を考えなくちゃいけないな」

古野間たちは兵士が居なくなったのを確認し、ドアを出て通路を進み始める。

一方のブラボーチームは東の通気口から侵入し、制御区画を目指していた。

「あそこを曲がれば制御区画のはずだ。全員、武器を構えろ」

ブラボーの全員が武器を構え、部屋に飛び込む。そこには手前のドア付近に三人、部屋の中央に六人、後方のドア付近に四人の計十三名の敵兵士が制御区画の警備をしていた。敵兵士たちもすぐにブラボーチームに気が付きこちらを撃ってくる。ブラボーチームはコスモガンを構え、狙いを定めて撃ち始める。その数秒後、収容所全体に警報が鳴り響く。

「対応が早いな。どうするか」

ブラボーの隊長は、応戦しながらこの後の行動を即時に考える。頭に浮かんだ作戦は二つ。一つはこのまま増援の敵兵士も全て倒し完全に制御区画を制圧すること。二つ目は一度通気口まで撤退し態勢を建て直すこと。後者は敵も態勢を整えてしまうので却下し、増援の敵兵士も倒すことを決める。

「このまま、押しきるぞ」

「了解」

部下に指示を出しながら、部屋の反対側で機械に隠れながら射撃をしていた敵兵士を倒す。敵兵士の残りは六人。対して、こちらは全員戦える。敵の射撃により一人が左の二の腕にかすり傷を付けられたが、まだ戦える。このままいけば、この区画を制圧できると隊長は思っていた。しかし、数十秒後に部屋後方のドアから敵兵士の増援が二十人走って入ってくることで隊長の期待が不安へと変わった。

「隊長。一度撤退した方が……」

「いや……、そうだな。撤退しよう」

五人の隊員たちはすぐに撤退用の陣形になり撤退を始める。隊長は最後まで敵兵を引き付け、隊員が撤退する時間を稼ぐ。隊員が全員撤退したことを確認し隊長も撤退しようとしたとき、不意に右肩に痛みを感じる。しかしそこでは痛みを頭の中から追い出し、確保してあった通気口まで撤退をする。安堵が心を満たし、初めて痛みがある右肩を見る。そこには一つの丸い穴が開いており、隊服に赤い染みがある。

出来ていた。

「隊長！ その傷はすぐに帰って治療しなければなりませんよ！」

「そう騒ぐな。とりあえず作戦が優先だ。数分後にもう一度突撃するぞ」

「でも……」

「ここで政府高官を助け出さないとこの戦いが終わった後、地球はさらに混乱する。それだけは避けなければならん」

「そうですね。ヤマトが帰ってきたときに笑顔で迎えられるようになきゃですね」

「分かってくればそれでいい。準備できたな。いくぞ！」

ブラボーチームは通気口から出て、敵兵士がいる部屋に飛び込む。隊長は右肩の痛みを我慢しながら、左手だけでコスモガンを続けて三度撃つ。一発目は奥の壁、二発目は手前の機械に当たり三発目は敵兵にヒットし倒すことに成功する。他の隊員も隊長の怪我に対する報復として次々と敵兵を倒していく。

「これで最後だ！」

隊員の一人が最後の敵兵を倒し、制御区画を完全に制圧する。

「こちら、ブラボー。制御区画制圧完了。繰り返す、制御区画制圧完了」

「了解した。そのまま作戦が終了するまで耐えてくれ。」

「分かりました。ただ、隊長が負傷してしまい重傷です。医療班を一人回してください」

「分かった。すぐに手配する。」

トランシーバーでの通信が終了し、隊員は隊長の応急措置を施す。

「隊長、もう少しで医療班が到着します。もう少しだけ耐えてください」

「すまないな、隊長が怪我するなんて俺は失格だよ」

「何いってるんですか。皆で一緒に帰りますよ」

「ああ、もう少しだ。皆気を抜くんじゃないぞ」

その後医療班が到着し、隊長は処置を受け一命を取り留めることが出来た。

その頃、キャットチームは牢屋区画に到着し高官の解放に成功していた。高官の全員が収容所から脱出することに成功し、キャットも護衛のために離脱していった。

## 第十三話

「ベータは制圧完了、キャットは高官の護衛で撤退。残るは俺たちだけか」

「早いとこ終わらせましょう」

「そうだな」

古野間たちアルファは兵器開発区画の天井の裏にある通気口の中で様子を伺っていた。

「見えるだけでも十五人か。さらに五人ぐらいは居るだろう。宗像、閃光弾いくつ持つてるか？」

「三つです」

「そうか。よし、まず宗像が閃光弾を部屋内に投げろ。それで敵が怯んだ隙に一気に仕掛けるぞ」

「分かりました」

隊員が小声で返事をする。そして対閃光ゴーグルを全員が着け、それを合図にしたように宗像が通気口を開けて閃光弾を投げ込む。投げ込まれた三つの閃光弾は、床に到達するとほぼ同時にはじけ、まばゆい光を作り出す。

「全員、突撃！」

通気口から滑り出るようにして降り立ったアルファチームは流れるような動きで銃を構え、敵兵に向かって引き金をひく。敵兵が何人か倒れ、さらに数秒後敵兵士も反撃を始める。しかし、完全に目が回復しておらず放たれた弾は明後日の方向へ飛んでいく。

「押しきれ！」

「はい！」

アルファチームの弾幕がさらに厚くなり、敵兵士を倒し終わる。

「部屋を制圧せよ！」

「了解」

隊員が部屋のいたるところに散らばり、製造用の機械などを制圧する。その時、

「なんだあれ！」

一人の隊員が捉えたのはドア近くの天井が開き、四足歩行の機械が下りてくる。隊員はあつけにとられ数秒間止まってしまった。その間に敵の新兵器は態勢を整え、こちらに向かってアサルトライフルの弾をばらまいてくる。

「何してる！ 早く隠れる！」

古野間が渴を入れ、アルファチームは動き出す。しかし、行動が遅れた一人が腹部に弾を受け倒れこむ。

「くそ、全員、機械の影に隠れながら応戦せよ」

「了解」

機械の影に隠れ、コスモガンで兵器に射撃するが全て弾かれてしまい、ダメージを与えることが出来ない。

「なんて装甲の硬さなんだよ！」

隊員の一人が喚くが、いくら攻撃しても結果は変わらない。

「どこかに必ず弱点はあるはずだ。なんとしても探しだせ」

「弱点……足の付け根とか関節ならいけるかもしれないよ」

「そうだな。全員、足の関節を重点的に狙ってくれ」

六人はコスモガンの照準を関節に合わせて、銃口からビームを放つ。そのまま、真っ直ぐ飛んでいったビームは見事、関節に当たって煙や火花をあげさせることに成功する。

「よし、このまま集中攻撃だ」

「隊長、あれを！」

一人の隊員に呼ばれ敵兵器を見ると、ちやうど敵兵器が跳躍するところだった。

「全員、警戒！」

嫌な予感を感じ古野間が全員に伝達した直後、敵兵器が床を蹴り跳躍する。そのままの勢いで隊員の一人に向かっていき、口のような所が開き銃口が飛び出してくる。

「アルファ2、避ける！」

「くっ！」

アルファ2は機械の影に隠れようとするが、兵器の方が数秒早く銃口から散弾が発射され隊員の体を貫いてしまう。一度着地したのも

つかの間、また跳躍しようと敵兵器は姿勢を屈める。

「また来るぞー！」

今度は全員がすぐに影に隠れ、攻撃をやり過ぎず。

「これ以上攻撃させたらまた被害が増える。さっさと倒すぞ」

「了解」

隊員たちは再び関節を重点的に狙って射撃をする。敵兵器からの反撃で二人が負傷してしまうが、数分後には敵兵器の足を壊すことに成功し、動けなくなった所に手榴弾を数発投げ込み完全に爆破する。

「やったか」

「辛い戦いでしたね」

「ああ、そうだな。宗像、ブラボーに連絡。「制御区画のコンピューターを爆破し、帰還せよ」と言ってくれ」

「了解です」

数分後、基地の一角で爆発が起き、全ての照明が落ちた。さらに隔壁が降り、全てロックされた。それを合図に、アルファチームも脱出を開始する。その時、古野間は基地のあちこちに爆弾を置いていった。アルファチームとブラボーチームが脱出を完了してから数分後、古野間がボタンを押し後方で大きな爆発が起きたことを確認する。

「全く、兵器開発部にはこのCIをさらに改良させないとだな。あんなんじゃない、どこにも配備できないぞ」

アルフォンはバギーを運転しながら一人呟いた。隣には雪が乗っているがずっと外を眺めており、何もしゃべろうとしない。

「雪、少しは話したらどうだ」

「……」

「また、あの男のことを考えているのか？ 確か名前は、……古代だったか？」

「……」



「まあ、いい」

バギーは静かに荒野を進んでいった。

太陽系外縁部・第五艦隊旗艦銀河

「副艦長、艦載機の整備は終わりましたか？」

「はい。全機、いつでも発進可能です」

「他の艦隊もしびれをきたしているでしょう。だけど今は耐えなければならぬわね。必ずあの船がやってくる。それまでは必ず持ちこたえなければならぬ」

艦長の藤堂早紀の口から出た言葉の最後は自分の心に向けた言葉でもあった。三年前のガトランティス戦を生き延び、銀河が武装化されたとき早紀はこう思った。

—— 今度こそ、この銀河で地球を守らなければならないと——

三年前のガトランティス戦では、A I の判断に従って物量作戦を実行していた。周りからは、「気持ちのない冷徹な女」と呼ばれていた事も知っていた。そんな中、あの艦の活躍を間近で見た早紀は人間の気持ちを捨ててくる事が出来ず、最後は己の気持ちに従い行動した。それからというもの、早紀は人間を信じるようになった。そして三年間、銀河艦長の職に就いていた。今回も、必ずヤマトが活路を開いてくれる。早紀は、心の中で確信していた。

## 第十四話

ヤマト・作戦会議室

作戦会議室には古代、島、真田などの艦橋クルーと艦長の山南が集まっていた。

「これを見てほしい。この先にある銀河は光も通さないほどの密度になっていて。便宜上黒色銀河と呼ぶ事にする。そして今回の観測により、この銀河の後方にもうひとつ銀河があることが分かった。地球からは黒色銀河の影響で全く観測されなかったんだ。我々はこの銀河を白色銀河と呼ぼうとおもう。敵の母星はこの白色銀河にあると思われるんだ。ただ、白色銀河に行くには黒色銀河を通らなければならないんだよ」

「ワープなどで迂回することは出来ないんですか？」

「ああ、ワープするには直径が大きすぎる。迂回するにもこの黒色銀河は端にいけばいくほど渦の流れが速くなる。ここを通るとなると余計に時間がかかってしまっただろう」

「そうですか。となると中心を抜けるしか方法は無いわけですね」

「ああ、そうなるだろうな。艦長、どうしますか？」

「銀河中心しか道が無いならそこを通るしかないだろう。古代、銀河中心を通る間は第一種戦闘配備のままだ」

「分かりました」

「よし、では艦内時間20:00に航行を開始する。全員持ち場で待機せよ」

「はい」

九人は解散し各自の持ち場に戻り、部下に指示をだす。

「エンジン始動、全艦発進！」

ヤマトたちは縦一列の陣形になり、銀河中心部の突破を始める。

「レーダー・スキャナー共に感度悪い。暗黒ガスの影響だと思われる  
す」

「こんな状況前にもありませんね」

「そうだな。今回も目だけがたよりだぞ」

「こんなときに敵が攻めてきたら困りますね」

「太田変なこと言うなよ」

「えへへ」

「作戦行動中だ。私語は慎め」

「すみません！」

その時、

「んっ？」

古代が席を立ち、前方を見つめ始める。

「古代、どうした？」

異変に気づいた山南が古代に聞く。

「いえ、左側前方が一瞬光ったような気がしまして」

「レーダーに感は？」

「ありません」

「そうか。一応気を付……ぐっ！」

山南が指示を出そうとしたとき、不意に艦橋を大きな衝撃が襲い、  
爆発音を響かせる。

「被害報告！」

「左舷第一砲搭下部に被弾。火災が広がっている模様！」

「消火班急げ！ 波動防壁展開」

「相原、各艦に伝達。レーダー手、敵の位置は？」

「ノイズの影響で正確な位置は分かりませんが、恐らく左前方十五万  
宇宙キロぐらいかと思われます」

「敵の砲撃位置から、正確な位置を割り出してくれ。古代は、座標が分  
かり次第砲撃開始。ただし敵の撃滅ではなく、この宙域の突破を最優  
先に考えろ」

「分かりました。主砲発射用意。完了次第指示あるまで待機」

「島、主砲発射と同時に機関最大出力。現宙域を離脱する」

「分かりました」

「解析完了。ヤマトより左舷前方十四万宇宙キロに艦隊を確認しました。戦術長に座標送ります」

「戦術長受け取った。各艦データリンク完了。主砲、左旋回三十度、上角プラス三度、撃ちく方始め！」

ヤマトの主砲六門からビームが放たれ、敵艦隊がいると思われる座標に向かっていく。一テンポ遅れて他の艦艇からも砲撃が始まる。

「機関最大！ ヨーソロー！」

ヤマト艦隊は速度を増して、敵艦隊との距離を離していく。

「敵追撃してきます。距離三十万宇宙キロ」

レーダーには相変わらず反応があるが、段々と距離を離しつつあった。その時、太田があるものを発見する。

「前方に大規模な小惑星帯を発見」

「そこで、やり過ぎそう。島、ヤマト全速前進！」

「はい。全速前進！」

ヤマトたち九隻は大きな岩に隠れ、エンジンを停止して敵艦隊が通り過ぎるのを待つ。数分後、敵艦隊が小惑星帯の前を通り過ぎ、消えていった。

「敵艦隊、反応消失」

「ふう、やり過ぎせましたね」

「まだ油断は出来んよ。後十五分だけ待つ」

「はい」

「十五分経った。レーダー手、この先の空間はどうなっている？」

「この先は少し開けた空間になっています。ガスも薄くなっていると思われます」

「分かった。よし、発進しよう」

一度停止したエンジンに再び火を入れ、動き出していく。

「……レーダー復旧。ああ！」

「どうした、滞り？」

「ヤマトの周りにゴルバが九隻も！」

古代はあわてて窓の外を確認する。すると四方八方にゴルバが浮かんでいた。

「くそ、いつの間に！」

「誘い込まれたか。相原、ネメシスに通達。「貴艦はミサイル攻撃で対応せよ」だ。真田、無人艦も同様だ」

「分かりました」

「古代、三式弾に切り替えろ」

「了解」

各砲塔では、切り替えのために戦術科の隊員たちがあわただしく動いていた。

#### ゴルバ・艦橋

「ミョーズもしくじったな。こんな艦隊に殺られるとは実力不足にも程がある。各艦、砲門開け。一斉射撃開始。蜂の巣にしてやれ」

ゴルバ艦隊クルーギス総司令の号令と共に九隻のゴルバの上部が回転して上がっていき、ビーム砲やミサイル発射管などの多様な武器が姿を露にしてヤマトたちを照準に合わせる。そして一斉に発射されヤマトやネメシスに向かって飛んでいく。

## 第十五話

艦橋には非常灯の赤い光が常時輝き、衝撃が何回も艦橋を襲う。

「波動防壁、三十五パーセントまで低下！ 展開可能時間残り二分！」  
「護衛艦、「夕張」「夜雲」「京葉」轟沈！ 「ミッドエー」「バルサナ」被害甚大」

「反撃の手を緩めるな！」

ヤマトの左右に旋回した主砲から次々と三式弾がゴルバに向かって発射される。ネメシスや残った艦艇からもミサイルや魚雷が発射され、ゴルバに命中するがたいしたダメージは与えられない。

「くそー。あまり効果がないぞ」

「どうしたらいいんだ！」

その時、真田が立ち上がり艦長に意見を述べる。

「副長、意見具申。今、工作室で開発中の波動カートリッジ弾を使ってみてはいかがでしょうか」

「波動カートリッジ弾とはなんだ？」

「波動砲の1／100のエネルギーを詰めた弾です。敵の装甲を貫通し内部で波動エネルギーを解放させ撃破します」

「面白そうだな。使ってみようじゃないか。南部、今すぐ装填を開始してくれ」

「分かりました。波動カートリッジ弾装填開始」

「装填急げよ！」

各砲塔では戦闘班の隊員が行き来し、二人一組で砲弾を装填している。

「第一砲塔、装填完了！」

「第二砲塔、装填完了！」

各砲塔から報告が届き、南部は古代に全砲塔の装填完了報告を伝える。

「全砲塔、装填完了しました」

「分かった。主砲撃ちく方始め！」

ヤマトの前部の主砲二基六門からそれぞれ別のゴルバに向かって波動カートリッジ弾が発射される。砲門から放たれた三発の砲弾は真っ直ぐゴルバに向かって飛んでいき、装甲を貫通して内部に侵入していく。

ゴルバ・艦橋

ゴルバの艦橋ではクーギスが艦長席に座り、指揮を取っていた。地球艦隊のビーム攻撃ではゴルバにひとつも傷をつけられず、ミサイル攻撃でも多少の傷が出来るだけだった。そのためクーギスは油断していた。その時、ゴルバ全体を大きな揺れが襲った。

「敵砲弾、装甲に命中！ 貫通し爆発、誘爆が広がっています！」

クーギスは油断していた地球艦隊の攻撃が、ゴルバに大きなダメージを与えたことに驚き、一瞬動きを止めたがすぐに部下に

「なに？ 急いで消火を……」機関部に誘爆がおよびもう持ちません！！

「なんだと！ くそ、こんなところでやられるわけには！ ……うわー！」

クーギス総司令の座乗しているゴルバが機関部の誘爆が原因で散した。その直後、次弾の装填が完了し他のゴルバに向かって波動カートリッジ弾がその爆発はすさまじく波動エネルギーの余波が周りのゴルバにまでおよび、数秒後には周りにいたすべてのゴルバが爆発してしまった。

ヤマトの艦橋では、全員が何が起きたか分からず呆然としていた。

「何が起こったんだ？」

「たぶん敵の装甲は、波動エネルギーに反応しやすいのだろうな」

「波動カートリッジ弾の波動エネルギーが反応したんですね」

「そうなるな」

「レーダー手、こちらの被害は？」

「護衛艦が三隻轟沈、二隻大破です。ネメシスにも多少の被害が出ています」

「大破した護衛艦は置いていくか。修理している時間もないからな。相原、ネメシスは航行しながら修理するようにと伝えてくれ」

「分かりました」

「島、敵の本拠地まであとすこしだ。発進してくれ」

「分かりました。エンジン始動。ヤマト、発進！」

エンジンを始動させてヤマトと他の艦艇は敵の本拠地に向かって航行を開始した。

### 地球・旧地下ドッグ

「それでは今回の作戦を説明するぞ。第三中央地区にある政府高官邸宅はいま暗黒星団帝国に占拠されている。その邸宅に地球の兵士がとらわれている。秘密裏に調べた結果、地球防衛軍司令部員、森雪三佐であることが判明した」

森雪という名前が出た瞬間集まった隊員のあちこちでひそひそ声が上がる。

「そこで、今回の作戦は政府高官邸宅に侵入し森雪三佐を救出する。邸宅に着くまで暗黒星団帝国の制服を着用する。内部に入り込んだら各自散開し、森雪三佐を救出後直ちに脱出する。わかったか？」



「はい！」

「出発は、明朝6：00だ。各自準備してくれ」

集まった隊員配られた暗黒星団帝国の制服を着用したりなど各自準備を始める。

### 第三中央地区・政府高官邸宅

「私は、三時頃戻ってくる。それまで護衛を頼んだぞ」

「はっ！ お任せください」

玄関に立つ隊員二人はアルフォンに敬礼をして、将校を見送る。

「よし、行くぞ」

今回は元ヤマト空間騎兵隊所属の永倉隊員を含む十人と、外で待機する三十人からなる四十一人で作戦を遂行していた。中に潜入する十人は姿勢を正し、整列して邸宅の正面入り口に近づいていく。

「その者、止まれ！」

十人は歩みを止め、古野間が質問に答える。

「アルフォン将校より、この邸宅の警備増加の為に派遣されてきました」

「そんな話は聞いていないぞ」

「パルチザンの抵抗が増しているため、緊急的な増援とおっしゃっていました」

「そうか。まあ、いい。全員持ち場につけ！」

「はっ！」

十人は玄関を抜け、大広間に入っていく。

「よし、全員散開！ 森雪三佐を探せ」

古野間が声を張らずに皆に伝える。それを合図にして十人は散開

し  
搜  
索  
を  
始  
め  
る  
。

## 第十六話

政府高官邸宅に侵入した十人は一階と二階に別れて搜索していた。しばらくすると古野間の通信機が鳴り、通信が入る。

「こちら、宗像。一階に森雪三佐の姿確認できず。」

「分かった。あとは二階だけだな」

一階はあらかじめ探し終わり、あとは二階の応接間や寝室を残すのみだった。

### 政府高官邸宅・二階寝室

森雪は部屋から繋がるバルコニーに出て、風に当たっていた。バルコニーから見えるのは、破壊し尽くされた街並みと遠方に見える炎の海だけだが、雪は空を見上げながら古代の事を考えていた。その時、不意にドアが開いた音がして後ろを振り返る。

「何ですか?」

そこには、暗黒星団帝国の制服を着た兵士がたっており、雪は思わず声を尖らせる。しかし、直後に聞こえた声により安堵することになる。

「森船務長、久し振りだね」

「永倉さん?! どうしてここに?」

「決まってるじゃないか。あんたを助けに来たんだよ。さあ、帰るよ」  
「ええ。帰りたいです」

「そうと決まれば話は速い。その前にまずはこれを着てね」

そういつて渡してきたのは暗黒星団帝国の制服だった。雪は今着ている服の上から制服を着て、ヘルメットをかぶった。

「よし、脱出するから付いてきな!」

雪は永倉に連れられながら部屋を出る。

「こちらら、永倉。雪さんは無事保護しました。」

「そうか、分かった。もう少しそこで待機してくれ」

「了解。」

古野間は通信を切り替え、外で待機している別動隊に通信を繋げる。

「森雪三佐の救出は完了した。あとはよろしく頼むぞ」

「分かりました。派手にいくので流れ弾に当たらないでくださいね。」

「ああ」

通信を切り、古野間は潜入組との合流地点に急ぐ。数分後には、入り口の方で銃撃戦の音が聞こえ始める。時おり、バズーカも撃ち込まれており衝撃が中まで伝わってくる。通路を進んでいくと、やがて広い場所に着きそこにはもう他の潜入組が揃っていた。さらに十人に守られるように真ん中に雪が立っていた。

「もう全員、集まっているな。今、外では別動隊が敵兵士を引き付けてくれている。俺たちは今のうちに裏口から脱出し、ドッグに帰還する。全員付いてこい！」

「了解」

待機していた十人に手短に話をして、古野間は歩き始める。その後を十人が後方を確認しながら付いていく。

数分後、裏口を脱出した古野間たちはドッグを指して歩を進めていた。しかし不意に気配を感じ立ち止まる。

「何かいる。全員止まれ」

後方に指示を出して、周りを警戒する。すると案の定付近の瓦礫の後ろから敵兵士が三十人ほど飛び出してくる。

「お前ら、地球人だな。反乱分子はこれより拘束しカザン様に届けさせてもらう」

「そんなことさせるかよー」

部下の一人が発砲し、一番前にいた敵兵士が倒れる。それを合図にしたように銃撃戦が始まる。雪は永倉に連れられ近くの瓦礫の裏に

隠れる。

「永倉、森三佐を連れて先にいけ！」

「了解！　いくよ、船務長！」

永倉と雪は瓦礫の間を進んでこの付近から離脱していく。

「全員、聞こえているな。ある程度時間を稼いだら俺たちも脱出する。それまでは耐えろ！」

「分かりました、なんとしても耐えて見せますよ」

瓦礫を盾がわりにしながら、一人一人敵兵士を倒していく。激戦の末、敵兵士は十四人まで減っていた。こちらも何人か負傷者を出しているが、軽傷なので撤退は出来る。

「これ以上はキツいな。全員、射撃しながら後退するぞ」

「了解」

古野間と宗像が負傷した隊員を連れて歩き始める。他の隊員はそれを支援するように発砲しながら後退を開始する。

## 旧地下ドッグ

「森くん、よく帰ってきてくれた」

「いえ、こちらこそ迷惑をかけてしまい申し訳ありませんでした」

「いや、森くんが帰ってきてくれただけでも作戦を実施したかいは有ったな」

「長官、ひとつお聞きしてもよろしいですか？」

「なんだね？」

「ヤマトはどうなつたんですか？」

「ヤマトは今、敵の本星に向かっていて。古代は無事だよ」

「そうですか。ありがとうございます」

「今日はゆつくり休んでくれ。明日からは森君にも作戦に参加してもらおう。なにぶん私達は人数が足りないのよな」

「こちらこそお役に立てるように頑張ります。では、本日はこれで」  
雪は敬礼をして、藤堂長官と別れて仮設された部屋へと戻っていった。

地球から五十九万光年・ヤマト

「よし、中心部を抜けるぞ」

その数分後、ヤマトの艦橋はまばゆい光に包まれ古代たちは思わず目をつぶってしまう。数秒後に目を開けると、そこにはひとつひとつの星がまばゆい光を出しそれが数十万個集まって出来た白色銀河が広がっていた。

「ふう、なんとか暗黒銀河を越えられたな。それにしても眩しいな」

「そうだな。とてもこの中に敵の本星があるとは思えない」

「島、このまま敵の本星があると思われる場所まで最大船速で向かう。レーダー手は周辺警戒を怠るな」

「了解。ヤマト最大船速に移行」

「あつ！ 前方に多数のワープアウト反応！ どんどん増えています。数、今いるだけでも百隻を超えています」

「なんだと！ 全艦直ちに戦闘配置」

古代が指示を出し、艦内に警報が鳴り響く。

## 第十七話

「おい、この数はなんなんだよ!」

メインモニターに映し出されている敵艦を示す光点は二百隻をゆうに越えており、艦橋にいる全員が思わず唾を飲む。その状況を見て、山南はあるアイデアを思いつく。

「相原、ネメシスの清水艦長に連絡を頼む」

「分かりました。パネルに出します」

すぐにメインモニターに清水が現れる。

「山南艦長どうされましたか?」

「さすがに敵の数が多すぎるのでな。ネメシスのあれを使ってももらつていいかね?」

「あれですか。……分かりました。すぐに準備を開始します。それまでは、敵を引き付けてください」

「分かっている」

通信が終了し、山南は帽子を深く被り直す。

「艦長、あれとは?」

「じきにわかるさ。これよりヤマト並びに残りの艦艇はネメシス準備完了まで敵を引き付ける。ただ島、距離は五十万宇宙キロを維持してくれ」

「了解」

「主砲、撃ちく方始め! 続いて艦首魚雷水平射」

ヤマトや他の艦艇からショックカノンが発射され、敵に向かって飛んでいく。それと同時に敵艦隊からもビームが放たれ、激しい砲撃戦が開始される。

山南との通信が終了し、清水は艦橋の乗組員に指示を出していく。「これより、あれを使う。高機動ブースター並びに対艦パルスレーザー起動」

「了解」

指示と同時に、ネメシスの艦体のあちこちのパネルが開き、ブースターと大きなパルスレーザー砲がせりだしてくる。

「主砲、副砲は高速連射モードにセット。A I システム起動」

「セット完了。A I 起動まで、残り三十秒！」

「艦内全体に通信を繋げてくれ。」「これより、ネメシスは高機動戦闘を開始する。乗組員全員は重船外服を着用。椅子に座ってシートベルトを必ず締めろ。」「

「A I 起動完了！ 小ワープ開始まで残り一分！」

「座標入力。ワープ終了地点、敵艦隊前方」

「ワープ開始まで十、九、八、七、六、五、四、三、二、一、ワープ！」

数秒後、ネメシスは加速して消えていった。

この宙域には、デザリウム本星を守るために各方面から集結した艦隊——総勢二百五十隻ほど——がヤマトたちを待ち構えていた。その艦隊の前方、十万宇宙キロにネメシスはワープアウトする。艦全体に張った氷を剥がしながらネメシスは敵艦隊を見据える。

「ワープ終了」

「左部メインエンジン最大出力。あとはA I に任せる。全員、首の骨を折るなよ」

「了解」

ネメシスはメインエンジンと各部のブースターを使って、敵艦隊に肉薄していく。敵艦を常に自動追尾している主砲や副砲からは一秒



もたたずに発射が繰り返され、敵艦を次々に貫き破片へと変えていく。それと同時にネメシスは度々バレルロールを繰り返し、大口径のパルスレーザーを放つ。細かいビームの筋は、敵艦艇の装甲を貫いて内部を破壊していく。

ネメシスの艦橋では全員がシートベルトを付け、椅子にしがみついていた。艦全体が大きく揺れ、何度も上下が入れ替わり、そんな状況でもなんとか全員が意識を保っていた。

「くっ、Gがすごいな」

「訓練を受けていたからなんとか持ちこたえていますけど、あと何分持つかわからないですよ」

「高機動システムはあと三分で解除する。もう少し耐えてくれ」

「りよ、了解」

暗黒星団帝国・旗艦バリアデス艦橋

「まだ、あの地球の艦艇を撃破できないのか？ たった一隻だぞ」

「それが、あまりにも高速で移動するので捉えきれません。さらに放たれる弾幕が厚く近づくことも困難です」

「そうか。こちらの被害は？」

「一番前面に展開していた銀河中央方面軍の五十隻は現時点で三十隻以上が撃沈。大破が十隻。その後方の第六師団は、十二隻撃沈。大破が五。さらに後続の艦隊にも被害が広がっています」

「ちっ！ たったの一隻だぞ。ここを突破されたら本星は丸裸だ。なんとしても撃破しろ！」

「は、はいー」

ヤマト・艦橋

メインモニターにはネメシスが敵艦隊を蹂躪する姿が映し出されていた。島は過去に見た光景を思いだし、山南に尋ねる。

「艦長、あれって確か……」

「そうだ。ネメシスには俺が乗ってたアンドロメダ改と似ている高機動戦闘システムが試験用として搭載されている」

「敵総数、百八十隻まで減少。ネメシスだけで四十五隻を撃沈、十隻を大破させています」

山南は少し俯き、顔をしかめながら語る。

「ただ乗組員は必ず重船外服を着用し、シートベルトを締めて椅子にしがみつかなければならぬ。そんだけG対策をしても乗組員の負担がすごく大きい。敵艦隊の数を大きく減らせる最大の武器、しかし、乗組員はしばらく動けなくなる。いわば諸刃の剣だよ」

「そうですか……」

山南は顔をあげ、メインモニターに顔を向ける。

「まもなくシステムが切れるだろう。あれにはリミッターがついているからな。システムが切れる直前にネメシスは波動砲を撃つだろう。古代、ネメシスが波動砲を発射しだいコスモタイガーを発進させネメシスの後退を援護させろ。古代も出てくれ」

「はい。山本、聞こえているな。コスモタイガー隊は発進準備をしろ  
いてくれ」

「了解。」

通信機の向こうで山本が返事をし、古代も格納庫にむかうためにエレベーターに向かって走っていく。

## 第十八話

ネメシス・艦橋

あいかかわらずネメシスは毎秒のペースでバレルロールを繰り返しておりネメシスの艦橋では、固定できなかった物が転がり続けている。

「残り一分三十秒で高機動システムが切れます」

「右部エンジン回復。艦長、ネメシスは波動砲発射体勢に入ります」

「分かった」

——ネメシスのAI 連動システムには波動砲発射も含まれており、敵艦艇の数が高機動システムで攻撃したあとも百隻を越えていた場合、最終セーフティが解除され波動砲を発射出来るようになる。なお春蘭にも同様のシステムが装備されているが、波動砲発射は含まれていない。これは、波動砲非搭載艦計画によるものでネメシスは建造後すぐに秘密任務に就いたためにAI から波動砲に関する情報を消し損ねたからである。——

ネメシスは反転し、敵艦隊とヤマトたちの中間地点に向かっていく。

「波動砲発射まで、五、四、三、二、一、波動砲発射します」

ネメシスの艦首の三門のシャッターが開き、波動砲が発射される。

バリアデス・艦橋

バリアデスの艦橋では、ネメシスが放った波動砲を感知しあわてふためいていた。

「敵艦艇から高エネルギーが来ます！」

「全艦に通達！ 現宙域から直ちに離脱せよ」

「間に合いません！ 接触まで三、二、一、零」

バリアデスの艦橋はまばゆい光と強い衝撃に包まれる。数秒後、艦長が目を開けるとそこには味方の残骸があちこちに漂っていた。

「……………こちらの被害は？」

「わがバリアデスに被害はありません。第七師団、銀河中央方面軍、第八狙撃艦隊は全艦消滅。他の部隊も大きな被害を受け、残存艦艇のなかで動けるのはバリアデスを含め十二隻のみです」

「そうか。バリアデス以外には全艦撤退命令を出せ」

「分かりました」

「バリアデスは少しでも時間を稼ぐため敵艦隊を引き付ける」

「はい。機関最大！ 目標、前方敵艦隊！ 全武装発射準備」

バリアデスは加速し、ヤマトたちにむかっていく。

ヤマト・コスモゼロ

古代はコスモゼロに乗り、あらかじめカタパルトで待機していた。そこに艦橋からの通信が入る。

「ネメシスの波動砲発射を確認した。航空隊は直ちに出击し、ネメシスの撤退援護に当たれ。」

「了解。アルファ1古代、take off！」

古代のコスモゼロはカタパルトを飛び出し、ネメシスに向かってエンジン音を吹かす。後方から、山本のコスモゼロや坂本たちのコスモタイガーが合流し大編隊となって漆黒の宇宙を飛行していく。

「前方より一隻接近。全機対艦ミサイルで対応せよ」

「了解」

古代はネメシスに接近してきている敵旗艦とおぼしき艦艇とすれ違い様にミサイル四発をおみまいする。さらに反転して後ろから二発のミサイルをエンジンブロックに叩き込む。他の機体も順次ミサイルを発射し、敵艦艇は炎に包まれていく。それでも反撃を続け、三機のコスモタイガーを落とすが接近してきたヤマトからの三式弾の斉射が直撃しついに四散する。

「ふう、他の敵は撤退したか。全機、ネメシスの護衛をしながらヤマトに帰還する」

「身動きが取れない敵艦艇はどうするんですか？」

「ほつといて大丈夫だろう。今は敵本拠地に向かうのが先だ」  
「そうですね」

ヤマトがネメシスの元に到着し、古代たちはヤマトに帰還する。

ヤマト・艦橋

「相原、ネメシスに通信を」

「分かりました」

相原は、パネルを操作してネメシスに通信を繋ぐ。数秒後には、メインパネルに疲れきった顔をしている清水が現れる。

「清水艦長、今回は無理をしてもらってすまなかった」

「いえ、大丈夫です。それにしてもすごいですね、あれは。」

「試験用とはいえってもGがすごいからな。使うとしても改良が必要だ。それで、動けそうか？」

「……まだむりですね。皆、最低でもあと十分は動けなそうです。」  
「そうか。では、出発は三十分後にする。それまではゆっくりと休んでくれ」

「ありがとうございます。」

ネメシスとの通信が切れる。山南は、ヤマト全体に通信を繋ぎ話し始める。

「敵本拠地への移動は三十分後に設定する。それまでヤマトの乗組員は周辺の警戒を厳とせよ」

古代たち艦橋クルーが敬礼をして配置に着く。

「太田、大破して動けない敵艦には特に注意を払ってくれ。システムだけ生きている可能性もあるからな」  
「分かりました」

ヤマトの左側に漂っている敵艦ではエンジンブロックがやられた

だけの艦艇が三隻有り、着々とヤマトを狙っていた。

「くつ、ヤマトめ。よくも我らを愚弄してくれたな。残っている火器はあるか?」

「前方の主砲が一基、ミサイル発射管が二門あります」

この艦の艦長は笑みを浮かべる。

「そうか。他の艦艇にも連絡。一分後にヤマトに斉射を行う」

「はい」

通信使は他の二隻に連絡を取る。

「一分経過。これより射撃を開始する。撃て!」

#### ヤマト・艦橋

パネルが敵の動きを感知し太田は声を荒らげる。

「左舷敵艦にエネルギー反応。三隻がこちらに発砲しようとしている模様」

「古代、戦闘用意。目標、敵艦艇三隻」

「はい。主砲ならびに副砲発射用意。目標、左舷敵艦三隻」

ヤマトの前方の主砲二基と副砲一基が左を向く。

「エネルギー伝達完了。照準よし!」

「敵艦からミサイル接近」

「構うな。撃ちく方始め!」

九門から放たれたビームの筋は、すべてきれいに敵艦の中心を貫き爆発させる。

「油断ならないな。太田、さらに敵艦がないか調べてくれ。」

「周囲に反応なし。今度こそ大丈夫です。」

「そうか。分かった」

## 第十九話

「前方に惑星を発見、メインパネルに出します」

数秒後、メインパネルに映された映像に艦橋クルーは驚いてしま  
う。

「あれは、地球じゃないか！ 我々は地球に帰ってきてしまったのか  
？」

「いえ、座標的には敵の本星だと思われま

「しかし、どう見ても……」

「戦術長意見具申。調査隊を編成しあの惑星に向かわせるべきだと思  
います」

「そうだな。古代は調査隊を率いてあの惑星の調査に当たってくれ  
「分かりました」

数十分後、調査隊は惑星に降り調査を始めていた。

「確かに、地形や川の形は地球と全く一緒だな」

「そうですね」

「ゼンポウニタテモノヲハツケン」

「そうか。案内してくれ」

調査隊は古代、真田、徳川、島、相原、サーシャ、アナライザーで  
ある。

「おい、あれを見ろ。建物の前に人がいるぞ」

「本当だ！ あれがこの惑星の住人なのか？」

「お待ちしておりました。私はサーダ。スカルダード様がお待ちで  
す」

古代たちは女に案内されるがままに建物内に案内される。応接間  
へと繋がる廊下には世界の有名な絵画や像等がところ狭しと並べら  
れていた。徳川が考える人をじっくりと見つめていたがやがて大広  
間が見えてくる。大広間に着くと同時に奥から声をかけられる。

「ようこそ、私が総統のスガルダードだ。地球の宇宙戦艦ヤマトの諸君。今日は存分に楽しんでくれ」

液体の入ったグラスが全員に配られスカルダードの合図で乾杯をする。

「スカルダード総統にお聞きしたい。ここはどこなのですか？」

「ここは君たちが出発してから二百年後の地球だ。君たちが帰ってこなかったせいでは地球人類は少数を残し絶滅してしまった」

「そんな！ うそだ！」

「それではこれを見たまえ」

突如としてスガルダードの全面にスクリーンが現れる。そこに写し出された映像と音声に古代たちは息を飲む。そこにはこの惑星を脱出したヤマトたちが写っていたのだ

「こちら、宇宙戦艦ヤマト戦闘班長古代！ 地球、聞こえていたとしたら謝らせてくれ。済まない。我々は敵艦隊に囲まれ全滅した。君たちの希望として帰ることはできなくなった。本当に済ま……」  
ヤマトが爆発し映像はそこで途切れる。

「こんなの……」

「この地に残り新たな歴史を築くか、昔の地球に戻ろうとして全滅するか、どちらか選ぶがいい」

古代たちは呆れたように部屋を出ていき、ヤマトに戻るため歩き始める。そして、入り口まで戻ってきたとき不意にサーシャが立ち止まる。

「どうしたんだ、サーシャ？」

「おじ様、私はここに残ります」

「なぜだい？」

「なにか嫌な予感がするんです」

「そうか、分かった。気をつけてくれよ」

サーシャが気づかれないように建物内に戻っていき、古代たちはヤマトに帰還する。



古代たちが艦橋に戻ると島や太田などがこちらに顔を向けてくる。

「古代、どうだったんだ？」

「ヤマトはこのあと暗黒星団帝国に全滅されるらしい」

「そんなことあるわけないじゃないですか」

「そうだな。希望を持とう」

一部始終を聞いた山南は帰還の指示を出す。

「……これより、ヤマトは地球に向け発進する」

「ちよつと待つてくださいい！」

その言葉と共に徳川が艦橋に走って入ってくる。

「おかしいんですよ！」

「なにがおかしいんだ、徳川？」

「考える人ですよ。足が逆なんです」

そう言っただけで徳川は本当の考える人を見せる。

「確かに……」

その時、エレベーターから真田が出てくる。

「古代、このグラスを見てくれ。さつき相原が持ち帰ってきて調べた

んだがあるべきはずのものがないんだ」

「あるべきはずのもの？」

「指紋だよ、指紋！ あの二人は地球人じゃない。偽物だ」

「そうか、俺たちを騙そうとして、地球人に化けたんだ！」

そんな会話を続けていると不意にコスモレーダーが反応を示す。

「レーダーに感！ 未確認艦艇一、他十二隻です」

「くそ、戦闘配置！ 全武装発射用意！」

「敵艦発砲！」

「こちらにも射撃を開始する。撃ちく方始め！」

前部主砲九門からショックカノンが放たれ、敵艦隊に向かって飛んでいく。数秒後には、敵艦艇を貫き爆発させる。時を同じくしてネメシスや残った他の艦艇からもミサイルやビームが放たれ敵艦隊の数を減らしていく。

「前方の未確認艦艇から高エネルギー反応を検知！」

敵艦艇から放たれるエネルギー波を調べていた真田が声を荒らげる。

「古代！ この反応は波動砲だ！」

「何だと！ 相原、ネメシスに連絡〔貴艦は直ちに重力子スプレッド弾を前方に展開せよ〕だ！」

「りよ、了解！」

「本艦はこれより波動砲発射体制に入る。艦長、いいですよね？」

山南は帽子を被り直し、にやつと笑う。

「ああ」

山南に頷き返し、古代は指示を出す。

「重力子スプレッドが消滅した瞬間に波動砲を発射する」

「エネルギー充填百二十％。いつでも撃てます」

「敵艦艇、波動砲を発射！ 重力子スプレッドに直撃まで三、二、一、重力子スプレッド消滅！」

「今だ、波動砲、発射！」

ヤマトから放たれた波動砲は敵艦隊に向かって付近の敵艦艇のデブリを消滅させながら飛んでいく。

## 第二十話

### 地球・防衛司令部

「今回の目標は、暗黒星団帝国のカザンとかいう男を倒すことだ。これより、三班に別れ最上階を目指す」

総勢十八人を一チーム六人の三チームに分け、アルファは正面エレベーター、ベータは非常階段、キャットは運搬用エレベーターから行動を開始する。

アルファは正面エレベーターを上り、五階に着く。

「ここからは違うエレベーターに乗り……隠れろ！」

後ろの隊員を通路の奥に押し込み、古野間は様子を伺う。そこには反対側から歩いてきた敵兵士三人が立ち止まりエレベーターを待っていたからだ。

「全く、カザン司令も人が悪いな。俺たちをこき使って何をしようとしてるんだか」

「さあな。俺たち一般兵士にはわからないさ。とりあえず速くカザン司令のところにいこうぜ」

敵兵士二人はエレベーターに乗り込み上へと向かっていった。古野間は上がっていくエレベーターの階表示を凝視し、部下に指示を出す。

「二十二階か。全員いくぞ」

アルファチームは最上階行きのエレベーターに乗り込み、銃の安全装置を解除する。

一方、非常階段から侵入したベータチームは十八階にある中央コントロールルームを目指していた。そこには、建物全体の各種電源などがまとめおかれている。ここを制圧できれば戦闘を優位に進められるのだ。

「もう少しで、コントロールルームに着きます。全員武器を構えてください」

ベータチームの隊長役は司令部の構造については私に分かるから行きたいという自らの志願で雪が務めている。

「コントロールルームの入り口は二つあります。三人は向こう側に配置してください。私の合図で突撃します」

「了解」

数分後にはトランシーバーから配置完了の一方が入る。雪は一呼吸置いて、合図を出す。

「突入！」

合図と同時にドアが開き、六人は同時に銃を構えながら部屋に入る。部屋の中には敵兵士十人が居たが、あまりに突然の出来事で何秒か動きを止めてしまった。ベータチームはそこを見逃さずに銃撃を開始する。一度目の射撃で三人が倒れ、やっと敵兵士も反撃を開始する。しかし、先手を取ったこちらが優位に戦闘を進め、二分後には制圧を完了する。それでも非常ベルをならされてしまい侵入は敵の知るところとなってしまう。雪は急いでキーボードを操作し、十八階以下の通路をすべて塞ぐ。そして、作戦指令室に電気を回す。

キャットチームは地球艦隊との連絡を取るため、二十一階にある作戦指令室を目指していた。作戦指令室には通信機材などを運ぶための運搬用エレベーターがあり、そこを利用して移動していた。

「もうすぐドアが開くぞ」

エレベーターのドアが開き、キャットチームは部屋に突入する。しかし、部屋には敵主力艦隊と通信をしていたと思われる兵士が三人おり、エレベーターのドアが開くのを待っていたのだ。キャットチームは突入した瞬間に銃撃を受け三人が腹部を負傷、しかし三人の必死の抵抗により二人を撃破。そしてもう一人を倒して制圧を完了する。すぐに応急処置を施し、三人はなんとか一命を取り留めた。その後、太陽系外縁に捕縛されている地球艦隊に秘匿回線である打電をする。

一方二十二階に到着した古野間たちのアルファチームは、敵兵士の待ち伏せをうけ苦戦していた。エレベーターホールは以外と広く隠れるスペースはいくらでもあるが何しろ敵の数が多く、一步でも動いたらまとめて蜂の巣にされかねない。

「くそ、どうしたらいいんだ!」

思わず一人が声を張らずに愚痴る。その時、どこからかホールにグレネードが投げ込まれ辺りは轟音と爆風に包まれる。

「古野間さん、ここは任せてください!」

姿は見えないが確実に雪の音が聞こえ、古野間は安堵する。

「ありがたえ! アルファ行くぞ!」

六人は植え込みを飛び出し、通路を走り抜けていく。通路の一番奥にある長官室のドアを蹴破り中に入るとそこには、カザンと兵士四人が銃を構えて待っていた。

「よく来たな、抵抗軍よ。ただ残念だ。このままおとなしくしていれば楽に死ぬことが出来たのにな。まあ、その勇気に免じて存分に相手してやる。やれ!」

カザンの回りにいた四人がアサルトライフルと思われる銃をこちらに向かって乱射してくる。一步遅れてこちらにも反撃を開始し、激しい銃撃戦となる。数分間に味方と敵兵士が次々と倒れていき、残るはカザンと古野間一人ずつとなる。

「そんな、お前ら精鋭じゃないか? なぜすぐに殺られる?」

カザンがわめくが、古野間はカザンを殴って馬乗りになり話を進める。

「司令官の頭が悪いと部下も悲惨だな。そんな司令官には死んでもらおう!」

古野間はコスモガンの引き金を引き、カザンの頭を撃ち抜く。

「こちら、古野間だ。作戦は成功した。キャットは医療班を長官室に呼んでくれ!」

〔了解〕

通信も終了し、古野間は机の上にある重核子爆弾のスイッチを回収する。数分後には医療班が到着し、古野間はタバコに火を付け静寂に包まれる街中を見下ろしていた。

## 二日後

「これより我々は重核子爆弾の解体を試みる。これが終われば囚われている地球艦隊も反撃を始めてくれるだろう。もう少しだ。皆、力を貸してくれ！」

藤堂長官の演説が終わり、ドッグ全体が各々の気合いの咆哮で包まれる。

「ここからは俺が説明する。重核子爆弾は本体から百メートル地点にバリアが張られている。このことは先日の調査で確認済みだ。そこで掘削車を使い地中を通って本体すぐ横から出る。そこから本体に侵入して爆弾解除を行う。今回は全員参加だ。一時間後には出発する」

その場にいた全員が古野間と藤堂長官に敬礼をして各々の準備のために散らばっていく。

## 第二十一話

「なんだあれは！」

波動砲で敵艦隊を撃破した古代たちが顔を上げて見たものは変わり果てたデザリアムの姿だった。

「敵の物質と波動エネルギーが融合し、真の姿が現れたんだ」

「真田、あの球体はなんだ？」

「あれはダイソン球と呼ばれるものです。波動砲でも破壊は不可能です」

「あつ、敵本星より通信です！」

「何？ メインパネルに出せ」

メインパネルに現れたのは古代たちの予想を裏切る人物だった。

「漣！」

「皆さん、これを破壊するには中から破壊するしかありません。これより南極側のゲートを解放します。そこから入ってきてください。その後中心に向かって進んで下さい。そこに敵の中心部があります。」

「分かった。漣はどうするんだ？」

「私は重核子爆弾の爆破装置を破壊します。」

「分かった。だがくれぐれも気を付けてくれ」

通信が切れる。その時、惑星の影から数十隻の敵艦隊が出てくる。

「くそ、俺たちを行かせないつもりか！」

「艦長、ネメシスから通信です」

メインパネルに清水が現れる。

「山南艦長、行ってください。ここは私達が死守します。」

「分かった。ここは任せたぞ」

清水は敬礼して通信を切る。

「南極側のゲートの解放を確認！」

「島、最大船速。ゲートから敵本星に侵入する」

「最大船速、ヨーソロー！」

ヤマトは速度を増し、開かれたゲートに向かっていく。

「本星外郭に熱源確認。砲台だと思われます！」

「構うな！」

ヤマトは何発か被弾するが数分後にはゲート内に侵入し、敵の中心部を目指して進んでいく。

「ヤマトは敵本星に向かっていきました」

「敵の艦数判明！ 六十隻です」

「よし、全艦戦闘配置。無人艦とのコントロールは？」

「完了しています」

「分かった。波動防壁展開、本艦の速射魚雷発射と同時に無人艦の一斉射撃を開始せよ」

「了解」

ネメシスの艦首から八本の魚雷が発射され、敵艦隊に飛んでいく。それと同時に無人艦二隻から砲撃が開始される。

「主砲、一番から二番並びに副砲一番発射用意！ 照準合わせ！」

「目標、捉えた！」

「撃て！」

ネメシスの砲門十二門から一斉にショックカノンが放たれる。

「敵艦隊、反撃を開始。ミサイル多数接近！」

「対空防御用意！ ヤマトが戻るまで攻撃の手を緩めるなよ」



「数キロ先に大きな熱源を確認！　そこから大型ミサイルが飛来してきます」

「来たか。波動防壁展開！　主砲で迎撃しろ」

「了解。主砲、撃ちろ方始め！」

ヤマトの第一、第二主塔が旋回し大型ミサイルを迎撃し始める。

「撃ち漏らし、多数接近」

「艦首魚雷、撃て！」

艦首魚雷六本がすぐさま発射され大型ミサイルを追跡、爆発させる。

「第二波、第三波続けて接近」

ヤマトの前方には大型ミサイルが実に十六本迫りつつあった。それを主砲で五本、魚雷で三本を撃墜したが残り八本はそのままヤマトに飛来し、波動防壁に直撃した。

「ミサイル、八本直撃！　波動防壁消失、再展開まで二十分！」

「中心部まで残り三分。ミサイル第四波来ます！」

「島、回避行動！」

「了解！」

島は操縦幹を右に切り、ヤマトを傾ける。左を飛んできたミサイル四発をすれすれで避け、今度は左に切つて残りの四発を避けようとする。しかし、避けきれずに一発が第一砲塔下部に直撃する。

「ダメージコントロール。応急班はすぐに第三ブロックへ向かえ」

「通路を抜けます！」

通路を抜けた惑星の中心部には大きな都市があり、ヤマトが到着するのを待っていたかのように砲台を展開、射撃を開始する。数十におよぶエネルギーの火線と小型ミサイルがヤマトに殺到し、ヤマトはあつという間に黒煙に包まれる。艦橋は何度も大きな衝撃に襲われ、相原のもとにはあちこちから被弾報告が上がる。

「第一番副砲に直撃！　艦首魚雷発射管、使用不能！」

「砲撃の手を緩めるな！　このまま都市に肉薄する！」

その時、第二艦橋に敵の火線が直撃し第一艦橋にまで大きな衝撃が

走る。山南は艦長席から転げ落ち、古代たちも体勢を崩す。その直後、艦長室にもミサイルが直撃、爆風が第一艦橋を包み込む。

「山南艦長！」

「大丈夫、破片が刺さっただけだ。気にするな」

「中心部より、通信！ パネルに出します」

パネルには左肩を負傷した漣が映し出され、切迫した状況を示している。

「爆破装置のコントローラーは入手しました。しかし、敵も取り戻そうとそこまで迫ってきています。敵の工作によりこのままでは残り五分で地球の爆弾が爆発します！ 波動砲で本星ごと破壊してください。ああ！」

その時、漣の背後からスカルダードが現れ漣に銃を向ける。

「小娘よ、そこまでだ。それを渡してもらおう。」

「嫌よ！」

「そうか。」

スカルダードは漣の腹を撃ち抜く。

「漣！」

「おじ……さま、は……や……く波動……砲を……撃って！」

漣は途切れ途切れながらも古代たちに波動砲の発射を頼みこむ。

「くっ、波動砲発射用意！」

「エネルギー充填百二十パーセント、いつでも撃てます」

古代は発射幹を握ったまま手を震わせ、動かない。

「……俺には漣を撃てない」

「古代、俺が撃つ！」

真田が席を立ち、古代の手に上から自分の手を重ねる。

「十、九、八、七、六、五、四、三、二、一、……発射！」

引き金が引かれ、波動砲が都市中心に向かって放たれる。

## 第二十二話

デザリアム外部

ヤマトがデザリアム内部に侵入し数分が経った。敵艦隊の砲撃は一段と激しさを増し、清水は苦戦を強いられていた。

「無人艦、二隻とも波動防壁への被弾が増えています。持ってあと数分です」

「本艦も波動計指圧が50%まで低下しています。今は敵の砲撃が集中しているところに展開していますが、あと十分持つか持たないかというところです」

「くそ、残りの敵艦数は？」

「二十六隻です」

「まだそんなにいるのか、火力を敵艦隊中央に集中！ 突破口を開くぞー！」

左右に旋回していた主砲二基、副砲三基が正面を向き一斉にショットカノンを放つ。同時に速射魚雷八本と短魚雷十六本がビームの軌道を追うように飛んでいく。まずショットカノンが五隻の戦艦の装甲を溶かし、追い討ちを掛けるように魚雷が装甲が溶けた場所から侵入し内部から爆発させていく。

「巡洋艦、波動防壁消失！ 被弾率増加しています！」

「反撃の手を緩めるなよ！」

ネメシスの武装は戦闘開始から絶え間なく発射されている。波動エネルギーが尽きることはないが、魚雷などの実弾系は底をつき始めている。

「ドレッドノート級、波動防壁消失！ 敵艦残り十五隻！」

「本艦の波動防壁は？」

「展開率20%を下回りました。これ以上低下すると被害が出ます」

「ヤマトが来るまではなんとしても持ちこたえ……ちっ！」

ネメシスの艦橋を大きな揺れが襲い、清水は思わず椅子に掴まる。

「波動防壁貫通されました！ 第三ブロックに火災を確認！」

「消火を急がせろ」

「速射魚雷あと二回で弾薬が尽きます！」

砲雷長からそう進言があった直後、ネメシスの右を航行していた巡洋艦が敵からの激しい砲撃に耐えきれず爆発する。

「ドレッドノート級も負荷が限界です。これ以上は持ちません！」

巡洋艦が爆発してから二分。ドレッドノート級が艦橋砲を放った瞬間に敵艦の砲撃がエンジン部分に命中、ドレッドノート級は爆発した。これにより、こちらはネメシス一艦だけとなりそれまで分散していた敵艦隊の砲撃が集中し始める。

「敵艦隊の砲撃、本艦に集中！」

細かい振動が艦橋を繰り返し襲い、清水は唇を噛み締める。

「単魚雷発射管、損傷！」

「第三副砲、被弾！」

「第二ブロック、火災広がっています！」

通信機からは、先程から被害報告が相次いで聞こえてくる。それでもネメシスは善戦し、敵艦隊は八隻まで数を減らしていた。しかし一筋の光線がネメシスの左舷サブエンジンに直撃。サブエンジンは爆発し、船体後部には大きな穴が空いてしまった。船体は大きく揺さぶられ、あちこちで怪我人が続出する。

「サブエンジンに直撃弾！ サブエンジンは機能を停止、さらに第二メインエンジンにまで被害が出ています。このままでは誘爆の危険があるので第二エンジンは停止させます」

「推力、50%まで低下！ ショックカノンの威力も落ちています！」

エンジン停止により波動砲は発射不能です」

「副砲のエネルギーを全て第一、第二主砲に回せ！ それで決着を着ける」

「エネルギー伝達終わる！ 照準合わせ完了！」

「てえー！」

主砲二基八門からショックカノンが放たれ、敵艦四隻を一気に風ぎ払う。同時に残った四隻から十二本もの光線が放たれネメシスに迫る。七本は逸れたが、五本は船体に直撃。そのうち一本が第一砲塔下部の予備弾装に当たり、大きな爆発を起こす。何とか断裂は免れたが

エネルギー伝導管が焼ききれ、第一砲塔より前方には電気とエネルギーが伝わらず重力子スプレッドや速射魚雷など全ての火器が使用不能となった。

「予備弾装に直撃弾！ 第一砲塔は完全に吹き飛び、第一砲塔より前方にある火器は全て使用不可能！」

「くそ、第二主砲は砲撃を続行！ 沈むのはせめて一隻でも数を減らしてからだ！」

すでに第二主砲の砲門のうち二門は融解しており、残り二門でショックカノンを放っている。清水には策があつたが、その策は一步間違えば自殺行為となる。

「航海長、取りかじ九十度！ 第三主砲と第四主砲の射程を確保しろ！」

「なるほど！ 了解しました！」

航海長は笑みを浮かべ、操縦幹を左に倒す。ネメシスの船体はゆっくりと左を向き、やがて射程が確保される。

「これでチェックメイトだ、撃ちく方始め！」

後方の主砲二基八門から最後の砲撃が開始され、残りの四隻を全て四散させる。

#### デザリアム内部

放たれた波動砲は都市を貫き、惑星中心部のコアまで到達。コアが大爆発を起こし、惑星全体が崩壊し始める。

「艦長！ この惑星は人工物ですがコアは天然物です。このままでは超新星爆発に巻き込まれます！」

「島、反転百八十度！ エンジン出力最大！」

ヤマトは反転、来た道を引き返し始める。後ろからは爆煙が迫り、

ヤマトを飲み込もうとしていた。しかし間一髪のところまで脱出に成功し、ヤマトのクルーが見たものは満身創痍のネメシスだった。船体のあちこちに大小の穴が空いており、中でも目を引くのは第一砲塔下部と左舷後部の大穴だった。

「相原、ネメシスに通信！」

数秒後にはネメシスの艦橋が移る。あちこちから黒煙が上がり、所々火花が上がっているが艦橋クルーは無事なようだった。

「山南さん、退路は確保しましたよ。」

清水はニヤつと笑う。

「無事で何よりだ。数分後には、超新星爆発が起きる。ワープは可能か？」

山南も一瞬笑みを浮かべ、すぐに真顔に戻り尋ねる。

「ええ、可能です。すぐにワープできます。」

「そうか、これよりワープでこの銀河から脱出する。遅れるなよ」

「了解です。」

数分後にはヤマトたちは異空間に消え、その直後デザリウムは超新星爆発を起こし、崩壊していった。

## 第二十三話

地球・市街地中心から二十キロ地点

重核子爆弾の置かれている地域は比較的地盤が緩いところが多く、掘削車などは緩いところを選べば簡単に進むことが出来る。古野間たちはこれを利用し、重核子爆弾から五十メートル地点に張られているバリアを掻い潜ろうとしていた。

数時間前

「古野間さん、見つけましたよー！」

「なに？すぐに案内してくれ！」

「こちらです！ここからなら土を削りながら重核子爆弾の直下まで行くことができます。」

「よし、すぐに作業に取りかかってくれ。」

「了解しました。」

都市部中心から十キロ離れた地点でようやくコンクリートで舗装された道が終わり、その地点を中心に地盤調査

を行ったところ、一ヶ所だけ地盤が緩いところを見つけたことが出来た。付近にはすでに事前に調達した六台の掘削車が待機しており、中の探査用の機材を全て外し、掘削部分だけを残して兵員輸送車に作り変えたこの車両には一台につき六十人が乗り、重核子爆弾を目標そうとしていた。そして古野間の指示により先頭の大型掘削車が地面を掘り進み始めた。その時、通信車両から一人の兵士が出てきて古野間に駆け寄ってくる。

「古野間さん、これを見てください。先に派遣した偵察員から情報が入りました。敵たちは、アルフォンという技術将校を筆頭として重核子爆弾内に籠城しているようです。」

「大体の数は把握できたか？」

「ええ、大体四百人位だと思われまます。」

「四百か、こちらよりも少し多いくらいだな。」

「そうですね。でもいけるはずですよ。敵本星で戦っているヤマトのた

めにも頑張りましたよ。」

「ああ。」

その後、古野間たちは別れて車両に乗り込み地面に消えていった。

現在

「あと三分で地上だ。全員、武装の最終確認をしておけ。」

古野間自身も通信しながらアサルトライフルのセーフティを解除する。そして数分後、掘削車は重核子爆弾から五十メートル地点から地上に出た。後部ハッチを開き、隊員たちは走って重核子爆弾に駆け寄っていき、ハッキングで入り口のロックを解除して中に入り込んだ古野間たちは、十二人ずつ三十チームに別れて三方向から起爆装置を指していく。

「各員、邪魔な敵兵は全て排除して上を目指せ。これが最後の戦いになる！必ず勝つぞ！」

「了解！」

他のメンバーの気合いの入った返事を聞き、古野間は一瞬だけ笑顔を浮かべた。しかし次の瞬間には前方から激しい銃撃が迫り、仕方なく通路の影に身を潜める。そして連続した銃撃が止んだと同時に上半身だけを出し、反撃を加えまた隠れる。そんな攻防は十分以上続いたが古野間が投げた手榴弾によってあっけなく終わりを迎えた。通路を走り抜けそのまま角を曲がると、無人迎撃システムが起動、侵入してきたパルチザンたちに無数の弾丸の雨を放ち始める。最前を進んでいた部隊の十二人のうち、四人に凶弾が降り注ぎその四人は床に崩れていった。後ろにいてなんとか生き残った隊員たちはコスモガンを目標に向かって撃ち込むが効果は無い。迎撃システムは無傷のままの銃口をコスモガンを放った隊員たちに向け、無数の弾丸を射出し始めた。銃口を向けられた隊員たちは回避を始めるが間に合わず、次々とその場に倒れこんだ。

「くそ、これでも食らえ！」



最前列の次を進んでいた部隊が持っていた複数のC4爆弾を迎撃システムのガトリングに投げつけ、爆発させる。至近での爆発により、迎撃システムはバラバラに吹き飛んでいった。隊員の間には一時の安息の時間が流れる。古野間はその間に他の隊に通信を送る。

「こちら古野間、そっちはどうだ？」

「こちらは二層目に到着しました。ただ、四十人規模の兵士に襲われ十三人が負傷、六人が死亡しました。それでもなんとか退けることが出来ましたが、この状態が続くときついです。」

「そうか。出来るだけ慎重に進んでくれ。」

〔了解〕

通信から数分、古野間たちも休息を終えタラップにたどり着きタラップを使い二層目へと上がっていった。

#### 数時間後

古野間率いる九つの部隊は少くない犠牲を出しつつもなんとか三層目へとたどり着いていた。しかし、タラップを上がりきった隊員が見たものは収容所で見た四脚兵器の量産型たちの姿だった。

「もう量産しているだー！くそー！」

大きい部屋に十体の四脚兵器が並び、こちらをにらんでいる。そして数秒後、先に動いたのは四脚兵器たちだった。前方に装備されたアサルトライフルをこちらに向かってばらまきながら、大きく飛びあがる。

「全員、散開！うまく死角に入れ！」

言うが速いか古野間は近くにあった柱の影に隠れる。しかし、百八人が全員隠れられるほどのスペースは当然なく、隠れられなかった隊員は体を弾で貫かれていく。それでも致命傷にならなかった隊員は残りの力を振り絞り、四足兵器に向かってコスモガンの引き金を引

く。放たれた複数のビームの筋は敵兵器の装甲に当たるが効果はな  
く、反撃とばかりにさらにアサルトライフルをばらまかれ隊員は絶命  
していった。

## 最終話

戦闘開始から数時間が経ち、一点集中の攻撃により敵兵器二機を倒したものの総勢百八名いた古野間率いる九つの部隊で構成されたアルファチームは六十名まで数を減らしていた。

「ちつ、数が多すぎる!」

古野間は手持ちのアサルトライフルの弾薬が切れたため、マガジンを交換してから通信機のスイッチを入れる。

「宗像、まだ合流出来ないか?」

「あと少しです。もう少しだけ耐えてください!」

「分かった。出来るだけ早く来てくれ!」

通信機のスイッチを切り、ライフルの銃口を敵機に向けると同時に引き金を引く。古野間の周りでは、仲間の隊員達が必死に反撃をしている。だが相手が優勢なのは変わることはなく、

「うわあ!」

「や、やめろ、来るな!」

至近距離で敵のライフルを受け倒れていく者やショットガンで蜂の巣にされるといふ光景が絶えず続いており、部屋の中は見るに耐えない状況だった。亡くなってゆく隊員を弔う暇もなく、古野間たちは銃の引き金を引き続ける。数時間の死闘により敵兵器は残り四機となったが、アルファチームが持ってきた弾薬類は既に底をつき始めていた。隊長である古野間も数力所に敵弾が掠り軽傷を負っていた。だが攻撃の手を緩める事は無く、隊長としての責務を果たそうとしていた。

「宗像達が合流するまでは何としても耐えるぞ!」

「了解!」

古野間の耳に届いた隊員の声はほんの数人だったが、周りでは片腕を突き上げたり笑みを浮かべるなど各々が古野間に呼応していた。それから数分が経ち、宗像率いるブラボーチームが合流する。到着した隊員達は地獄絵図となっている部屋の光景を見て、息をのんでいる。

「隊長、爆弾の起爆まであと30分もありません！　ここは任せて先に進んでください。全力でサポートします！　各員、アルファチームを囲み、死守しながら前進せよ！」

ブラボーチームは文字通り肉壁となりながら、アルファチームを部屋の出口へと進めていった。部屋の出口にたどり着く頃にはアルファチームよりも数を減らしていたブラボーチームであったが、古野間らがドアを通過したのを確認すると中からドアを閉め、部屋を封鎖した。古野間は振り返ることはせず唇をかみしめて、前進を指示した。やがてアルファチームは先ほどの部屋から続く螺旋状になっている階段を登りきり、新たな部屋へと到着する。一番先に部屋へ突入した古野間は人の気配を感じ、咄嗟に銃を構える。

「動くな！　手を上げろ」

古野間に背後から声をかけられた人物達はゆっくりとこちらに振り向いた。

「古野間さん！」

古野間は声から雪ということを確認して、銃を下ろした。それと同時に雪の後方に、五人ほどの空間騎兵が座つてうずくまっていることを確認する。

「森か！　何があった、なぜCチームはお前とこいつらしか残っていないんだ？」

「ここに着く直前で戦っていた多数の敵が手榴弾で自決しました。みんな、それに巻き込まれて……」

雪はそれだけというつむいた。

「そうか……だが、まだ戦いは終わっていない。ここを上がれば起爆装置を解除出来る。いくぞ」

古野間は座っている隊員に活をいれ直し、再び進み始める。

重核子爆弾内部・最上階

「雪、それにパルチザンの奴らも来たか……」

雪の到着を待っていたアルフオンは、銃を構えると同時に引き金を連続して引いた。放たれた複数の光は古野間を含め雪以外の全員の足を貫く。

「雪、これで君と戦える。さあ、銃を構えろ」

雪は手に持っていたコスモガンを構える。二人はそのまま見つめ合い、同時に引き金を引いた。すれ違った二つの光は、アルフオンの胸を貫き、一方は雪の腕を掠める。そして、アルフオンはその場で崩れ落ちた。

「アルフオン少尉！」

雪はアルフオンに駆け寄り、抱きかかえる。そして、アルフオンの胸の穴から見えるのが機械であることに気づいた。

「雪、すまなかつたね。地球人をたくさん殺してしまった。だけど仕方なかったんだ。見ての通り僕たちはサイボーグ、だから地球人の肉体を使って完璧な人間に戻りたかった。そのために侵略し蹂躪した。爆弾の解除は本星と重核子爆弾内部の2つを破壊しなければならぬ。だが、本星の方は先程解除された。あとはその機械を壊せばいい……あと2分だ。急げ……」

雪は息絶えたアルフオンを床に寝かせ、機械に銃の狙いを定め、引き金を引いた。その瞬間、内部の電力は途絶え機能を停止した。それを確認した雪は、振り返る。

「古野間さん、すぐに手当てを！」

雪は古野間達に応急処置を施し、すぐに全員でブラボーチームのいる部屋へと戻った。ドアを開き中に入ると、宗像を中心としたブラボーの生き残り8名は部屋の中央で怪我の処置を行っていた。

「隊長、終わりましたか……良かった」

宗像は笑顔でそう言うと、立ち上がる。

「さて、退屈している地球艦隊たちに知らせましょうか」

「ふっ、そうだな」

一時間後・司令部作戦司令室

「地球より各艦隊へ。「我、地球カイホウニ成功。行動ヲ開始セヨ」  
藤堂は、秘匿回線にて各艦隊へ指示を出した。

### 第1艦隊・春蘭

太陽系外縁部にて拘束されている各艦隊に通信が入ったのは、爆弾解除から三十分ほど経ってからだった。司令である近藤はただちに通達を各艦隊旗艦へ送った。そして、第一艦隊にも命令を出す。

「第一艦隊、全艦戦闘配置！ 駆逐艦部隊は高機動を生かし敵艦隊に肉薄、攪乱せよ！ ドレットノート級半数は駆逐艦の支援、もう半数は本艦と共に混乱した敵艦隊を一気に叩く！」

その通信を戦いの火蓋として、大規模な艦隊戦が開始される。2隻の駆逐艦は敵艦隊の両舷から陣形内へと侵入、魚雷を絶え間なく発射しながら敵艦隊の陣形を崩していく。そこに春蘭以下第一艦隊の猛烈な砲撃が命中し数分もたたないうちに敵艦隊は壊滅したのだった。

### 第五艦隊

「藤堂艦長、近藤司令より通信が。内容は「今までよく堪えた。思う存分暴れよ」です」

早紀は微笑み、椅子から立ち上がる。

「航空隊、全機発艦！ 前方の敵艦隊を殲滅せよ」

その合図とともに銀河の艦載機発艦口が開き、ブラックバード隊が射出される。それに続き、後方の空母からも続々とコスモタイガーが離陸していく。漆黒の宇宙を駆ける数十機の編隊が敵艦隊の頭上から襲いかかり、薄い対空砲火も虚しく次々と爆散していく。ものの数分で壊滅した敵艦隊の残骸を華麗に駆け抜け、航空隊は母艦へと帰還していった。そして銀河のレーダーがあるワープアウト反応を捉え

た。

「前方にワープアウト反応、これはヤマトです！」

銀河の前方に姿を現したのは、銀河の同型艦であり地球の希望の象徴である宇宙戦艦。どんなに傷を受けようとも、必ず勝利を持って帰ってくるその艦は今回も満身創痍であった。そしてもう一隻、その艦もまた瀕死であった。

「お待ちしておりました」

早紀以下、銀河のクルーは敬礼でヤマト達を迎えた。それと時を同じくして、銀河系内のデザリアム軍は一掃され地球は平和を取り戻したのだった。